

重要文化財 武雄鍋島家洋学関係資料 保存活用計画書
(案)

武 雄 市

序

武雄の地に残された貴重な資料を今後も守り伝えていくとともに、先人の先進の姿勢を将来へ向けての文化によるまちづくりの中で活かしていくことは、歴史的資産を受け継ぐ現代の私たちの使命であります。

武雄市は、令和4年秋に西九州新幹線が開業し、西九州エリアの交通結節点として、人やモノが交流する拠点『西九州のハブ都市』としての存在感が更に高まります。これを機に、全国から、世界から、たくさんの方に武雄市へ来ていただくためにも、「武雄鍋島家洋学関係資料」を観光の核の1つとして発信していく必要があります。

本計画は、「武雄鍋島家洋学関係資料」を適切に管理・運用し、良好な保存環境の維持に努めるとともに、市民や観光客が蘭学に親しめるような活用を行い、次世代へ伝えていくことを目的として策定したものです。

今後は、本計画に基づきながら、市民協働の中で「武雄鍋島家洋学関係資料」の保存と活用の推進に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、本計画策定に当たり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に深く感謝の意を表すとともに、今後ともご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

武雄市長 小 松 政

例 言

- 1 重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料保存活用計画（以下、本計画）書は、佐賀県武雄市武雄町大字武雄 5304 番地 1 の武雄市図書館・歴史資料館に所在する「重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料」の保存活用計画書である。
- 2 本計画は令和元（2019）年・2 年・3 年度（令和 4 年 10 月まで期間延長）の継続事業として、国庫補助事業文化庁文化資源活用事業費補助金（観光拠点整備事業）の交付を受けて実施した。
- 3 本計画は、「重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料保存活用計画策定委員会」を設置し助言を求め、文化庁・佐賀県の指導を得ながら、武雄市教育委員会文化課が事務局となって取りまとめたものである。
- 4 委員会の構成および経過については、巻末に掲載している。
- 5 本計画の作成にあたり、次の機関から協力と助言をいただいた。
都城島津邸 中津市歴史博物館

目 次

序 武雄市長 小松 政

例言・目次・口絵図版

第1章 計画策定の目的と期間	1
1 対象となる資料の概要	1
2 計画の目的	1
3 計画の位置付け	2
4 計画期間	3
第2章 武雄市の概要	4
1 武雄市の概要	4
（1）概要	4
（2）自然環境	4
（3）社会環境	6
① 交通	6
② 産業	6
③ 観光	6
（4）武雄鍋島家の歴史的概要	8
第3章 「武雄鍋島家洋学関係資料」の概要.....	9
1 資料の概要	9
2 歴史的概要	10
3 重要文化財指定までの経緯	13
（コラム）重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」の価値 川副義敦	14
第4章 現状と課題	16
1 施設の概要について	16
（1）資料の収蔵・展示施設について	16
（2）施設の特徴	18
（3）施設周辺の環境	19
2 資料の保存・管理について	20
（1）資料の管理など.....	20
（2）保存修理事業	21
（3）防災・防火	26
（4）保存環境	29
（5）有害生物被害対策	31
3 資料の活用について	32
（1）展示環境の概要	32

(2) 資料の展示	33
(3) 資料の公開と学術的活用	38
(コラム)「長崎方控」刊行の意義について 鳥井裕美子	39
(4) 教育活動	40
(5) 観光面での活用	40
第5章 保存活用計画	43
1 基本方針	43
2 適切な保存について	45
(1) 資料の管理	45
① 日常的な資料の管理	45
② 「武雄鍋島家洋学関係資料」の総点検	45
③ データベースソフトによる管理用台帳の作成	46
④ 資料のデジタル化の推進	47
(2) 保存環境の整備	48
① 収蔵スペースの確保	48
② 保存環境の点検と良好な環境の維持	48
③ 防災対策	51
④ 防犯対策	53
(3) 計画的な修理	54
① 資料の状態確認事業	54
② 国指定重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」保存修理事業の推進	54
3 適切な活用について	60
(1) 計画的な公開	60
① 資料の展示	60
② デジタルを利用した資料の公開	61
(2) 学術的活用	63
① 文書・記録類の記載内容の整理	63
② 研究成果、デジタル資料などの蓄積	63
(3) 教育活動	65
① 小中高校生向けの活動	65
② 一般向けの活動	66
(4) 観光面での活用	68
① ボランティアガイドと連携した活動	68
② 広域連携、民間連携による活動	69
③ インバウンド客への対応	70
【巻末資料】	
・保護に関する諸手続き	77
・関係法令	80

1) 文化財保護法（抜粋）	80
2) 文化財保護法施行令（抜粋）	87
・重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料保存活用計画策定委員会の構成および経過	88
・重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料一覧	90

※註：各写真については、製本印刷時に適宜トリミングして体裁を整えます。



「1. 文書・記録類」734～737：長崎方控^{ながさきかたひかえ}二～五



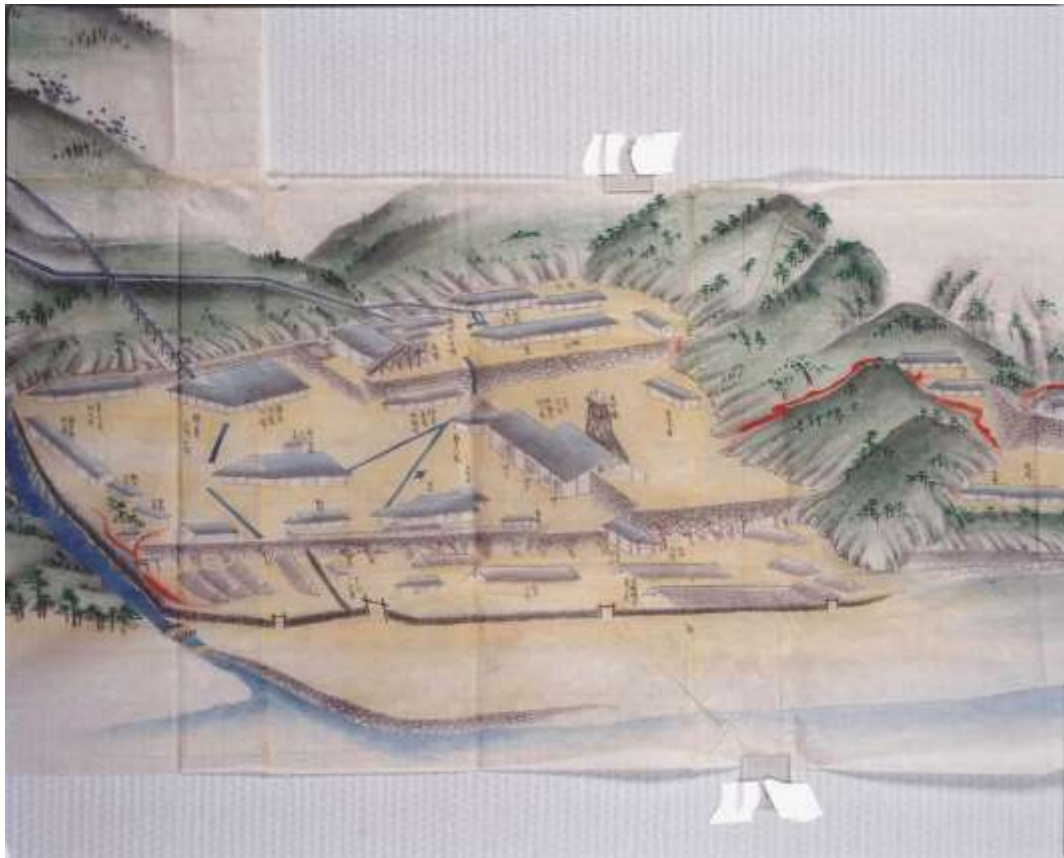
「2. 標本類」1：〔植物標本帳〕、2～4：腊葉^{さくよう}〔植物標本帳〕



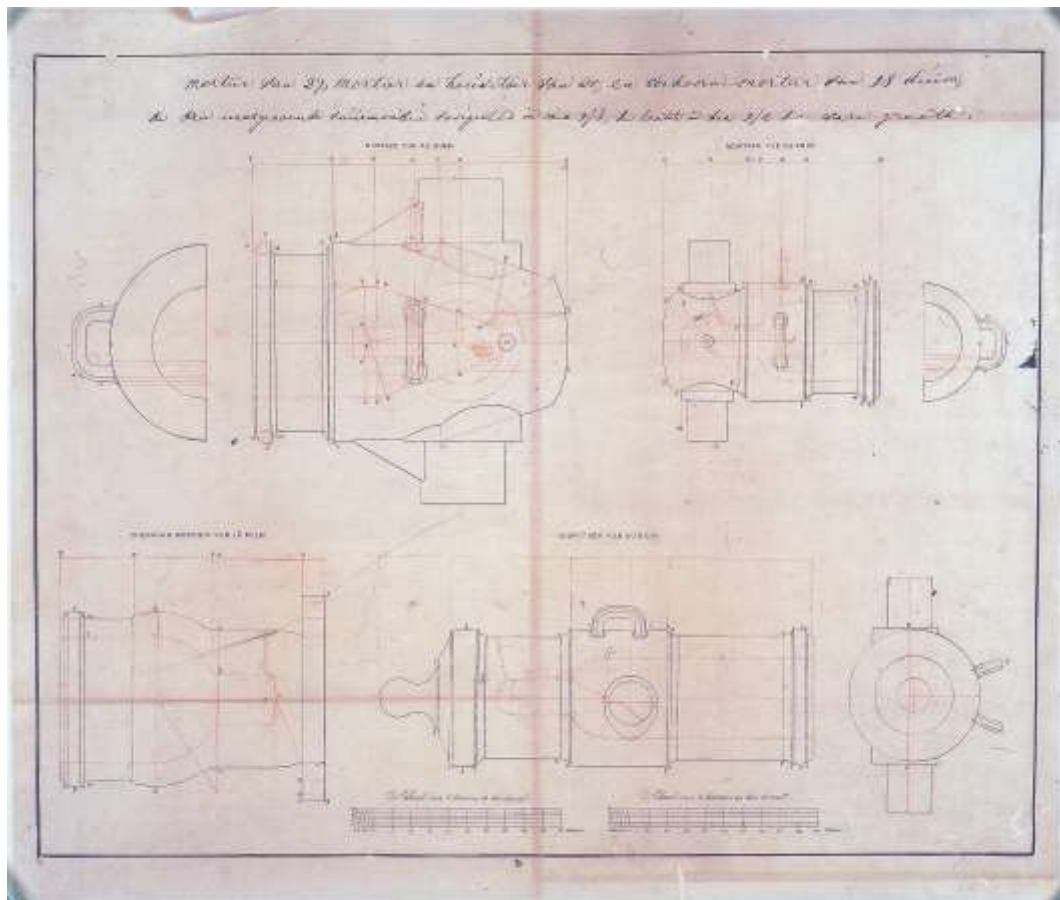
「3. 和書・訳書類」 224：ボムベカノンⅡ、226：〔ボンベカノン〕



「4. 洋書類」武雄蘭書^{たけおらんしょ}



「5. 絵図・地図類」24：薩州鹿兒島見取絵圖/薩州鹿兒島見取絵圖/
〔磯別邸の図・華倉村銅吹試方圖〕（集成館部分拡大）



「6. 図面類」84：29、20、13 ドイムモルチールと 20 ドイムハウキッスル（写）



「7. 写真」 1、3～7：上野彦馬関連の鶏卵紙写真^{けいらんししやしん}



「8. 器物類」 257：天球儀^{てんきゅうぎ}（左）、器物類 256：地球儀^{ちきゅうぎ}（右）

○長崎方控二～五（「1. 文書・記録類」734～737）

様々な物品が集積される貿易港長崎での武雄の購入記録。書籍、薬品、動植物、食品、革製品、金属製品、ガラス、陶磁器、器物類など、あらゆるものが記載されている。本来5冊から成るものだが、1冊目の行方が分からない。各冊とも、前半に注文品、後半に到来品が記録されている。記録された年代は天保9（1838）年から文久2（1862）年9月までで、鍋島茂義の逝去とともに終わる。

○〔植物標本帳〕、腊葉〔植物標本帳〕（「2. 標本類」1～4）

弘化から文久年間（1844～64）頃にかけての植物標本帳。中国・琉球・ヨーロッパ産の舶来植物の標本を収録し、名称・舶来年を記す。和名、漢名のほか、ラテン名、オランダ名が添えられているものもある。江戸時代の植物学において植物標本帳は希少で、在外種の舶来状況を知りうるだけでなく、園内で国内外の植物栽培に傾注したという茂義の科学的な姿勢を伝える貴重な資料である。

○ボムベカノンⅡ、〔ボンベカノン〕（「3. 和書・訳書類」224・226）

「ボンベカノン」はペキサンス砲とも呼ばれる破裂弾用の新式砲。この大砲の情報はアヘン戦争が勃発した天保11（1840）年に日本に伝わった。武雄ではこの年11月に「ペキサンス大砲絵図」を長崎に発注、弘化2（1845）年10月には原書を購入した。これを翌年8月までに武雄領抱の長崎のオランダ通詞西記志十に訳させたものがこの資料である。

○武雄蘭書（「4. 洋書類」他）

武雄の旧鍋島男爵家に伝わった蘭書は、有馬成甫が昭和32（1957）年の調査にもとづき、「武雄蘭書目録」（『武雄の蘭学』昭和37年、所収）を公表して以来、「武雄蘭書」と呼ばれてきた。この目録は69部138冊を記載し、このうちオランダ語原書は59部128冊で、ほかは日本で出版された訳書が含まれている。蒐集の蘭書は、語学・理工学・医学・軍事学・伝記・旅行記・雑誌・百科辞典にわたり、赤通し、手垢、また蔵書印・署名なども見られ、使用の形跡が明らかなものも多い。

○薩州鹿児島見取絵薩州鹿児島見取絵図／〔磯別邸の図・華倉村銅吹試方図〕（「5. 絵図・地図類」24）

安政4（1857）年6月、佐賀藩士千住大之助、佐野常民、中村奇輔らが、鍋島直正から島津斉彬に贈る電信機を携えて鹿児島を訪問。その際、11代薩摩藩主島津斉彬が推進していた集成館事業の様子を細かく描いたのが、この「薩州鹿児島見取絵図」である。鹿児島城下を俯瞰する「鹿児島見取絵図」や磯の集成館事業を描いた「磯別邸の図」など、12枚18景の絵図と風説書2冊からなる。

○29、20、13 ドイムモルチールと20 ドイムハウキッスル（写）（「6. 図面類」84）

武雄には、オランダやイギリス・マンチェスターで作製された原図と、それを武雄で写したと考えられるものとをあわせて、65枚の大砲とそれに関わる旋盤・台車・牽引用具などの設計図が残る。それに加え、大小さまざまな大砲切形や、モルチール砲、ホーウィッスル砲などの絵図、口径の拓本、標的図まで、武雄での砲術研究の熱心な取り組みを示す豊富な量の資料が残されている。

○上野彦馬関連の鶏卵紙写真（「7. 写真」1、3～7）

日本の職業写真家の先駆けの1人である上野彦馬の長崎の写場などで撮影されたと考えられる6葉の写真である。写真の裏には、「引田や」「姫松（カ）」「龍田」など、長崎丸山の遊女を撮影したことを推測させる書き込みが見えるものがある。使用されている撮影用の椅子や台から、いずれも元治元（1864）年から慶応年間（1865～68）に撮影されたものと考えられる。

○地球儀、天球儀（「8. 器物類2」56、257）

オランダ・アムステルダム製の地球儀・天球儀製作者であるレオナルド・ファルクの工房が作成した地球儀と天球儀。それぞれの収納箱には「天保十五年辰春」と書かれている。また「長崎方控 二」の天保15（1844）年2月10日の到来品に「蘭製天地球 二ツ」とあり、両者の記述が符合する。

第1章 計画策定の目的と期間

1 対象となる資料の概要

本計画の対象となる「重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料」の概要は以下のとおりである。

文化財の種類 重要文化財（歴史資料）

名 称 武雄鍋島家洋学関係資料

員 数 2,224 点

(内訳)	一. 文書・記録類	1,304 点	一. 標本類	4 点
	一. 和書・訳書類	284 点	一. 洋書類	133 点
	一. 絵図・地図類	36 点	一. 図面類	159 点
	一. 写真	7 点	一. 器物類	297 点

指定年月日 平成 26（2014）年 8 月 21 日

所 有 者 武雄市

所有者の住所 佐賀県武雄市武雄町大字昭和 12 番地 10

所 在 地 武雄市図書館・歴史資料館（佐賀県武雄市武雄町大字武雄 5304 番地 1）

19 世紀に入ると、日本は外国との交流を極めて制限していた【鎖国】の状態から、外圧により【開国】へ向かうこととなった。この頃から西洋の学問【蘭学】が精力的に導入されるようになり、明治期以降の他に類を見ない近代化の成功を導く基礎部分が形成されていく。武雄の蘭学・洋学は、その先駆的位置にあるもので、武雄の先人たちの先見の明が日本を動かす力の 1 つになったともいえる。

「武雄鍋島家洋学関係資料」は、全国でも有数の規模と質を誇る洋学の資料群であり、特に九州・中国地方の洋学を語るに際しては比肩するものを見出し難い。来歴が明らかであり、後述するように導入の過程を示す文書と現物資料の双方が含まれ、未使用の合成絵具、写真撮影用の照明器具であるガルハ焼入器、ファルク工房（オランダ）の地球儀と天球儀、薩摩藩の集成館事業を記録した「薩州鹿児島見取絵図」など、他に類例がない、或いは類例が少ない資料も数多く現存している。このことから、他館での洋学関連の企画展やメディアで洋学や幕末が取り上げられるときにも、当該文化財やその画像がしばしば借用されている。

2 計画の目的

「武雄鍋島家洋学関係資料」については、これまでも【武雄の蘭学】の呼称で市民に紹介してきたが、現在でも資料の存在や価値が十分に市民に認知され、親しまれているとは言い難い現状がある。

本計画は、「武雄鍋島家洋学関係資料」の文化的・歴史的価値を広く市民と共有し、協働して次世代へ引き継いでいくことを目的として策定するものである。また昨今、文化財を初めとする文化資源について、「保存」と「活用」の両輪で取り組むことが重要となっている。

このことから、西九州新幹線の開業で増加が見込まれる観光客、特にインバウンド客（外国人観光客）に対する文化資源としての一層の活用を図る。さらに、市民が武雄の蘭学・洋学資料への理解と愛着を深め、「武雄と言えば蘭学」「蘭学のまち武雄」の意識を持つこと、将来的には市民一人ひとりが、誇りをもって情報の発信者となることを目指す。また、武雄市外から訪れるインバウンド客を含めた観光客へ当該文化財の魅力を伝え、武雄市の観光の核の一つとすることで、文化・観光・地域活

性化の好循環の創出を目指す。

「武雄鍋島家洋学関係資料」を核として市民と観光で訪れた人々との間に交流を生み出し、武雄市訪問を魅力的でより充実したものとするのが、当該文化財の価値に対する認識を広げていくことにつながる。そのことが当該文化財を保存活用していく環境整備の必要性を、市民が意識する推進力となる。

本計画の目的を達成するために、「武雄鍋島家洋学関係資料」だけではなく、その他の関連資料も視野に入れることとする。16,000 余件に及ぶ武雄鍋島家資料全般および家臣の家資料などの収蔵資料や、武雄市内各所に残される資料などが対象として考えられる。武雄市の歴史、および周辺の歴史的環境を含めた視点で現在の資料を取り巻くさまざまな状況を体系的に捉える。そのうえで資料の保存活用における課題の解決に向け、将来的な維持管理、活用に関して、行政においては武雄市のまちづくりや教育に関する計画と関係を持たせる。かつ市民協働のもとに、適切な保存環境の確保、調査・研究の推進、計画的な修理、定期的な企画展・関連イベントの開催、学校教育・生涯学習との連携、観光客への情報発信などについて計画を策定することとした。

3 計画の位置付け

本計画は、武雄市の上位計画である「もっと輝く☆スター戦略☆（第2期武雄市まち・ひと・しごと創生総合戦略）」に即しており、文化、観光分野で連携した取り組みを推進するとともに、地域間、経済圏など広域での連携・協働を推進し、新たな人の流れと交流の創出を図るとしている。

また教育分野においては、武雄市における教育の基本方針を示している「武雄市の教育」において、文化財の保護・伝承と活用による伝統文化の継承、歴史的資源を活かした郷土愛の醸成など市民総参加による教育の推進を図るとしている。

本計画は、この2つの計画に即して策定するものであり、2つの計画における根拠となる記述については次のとおりである。

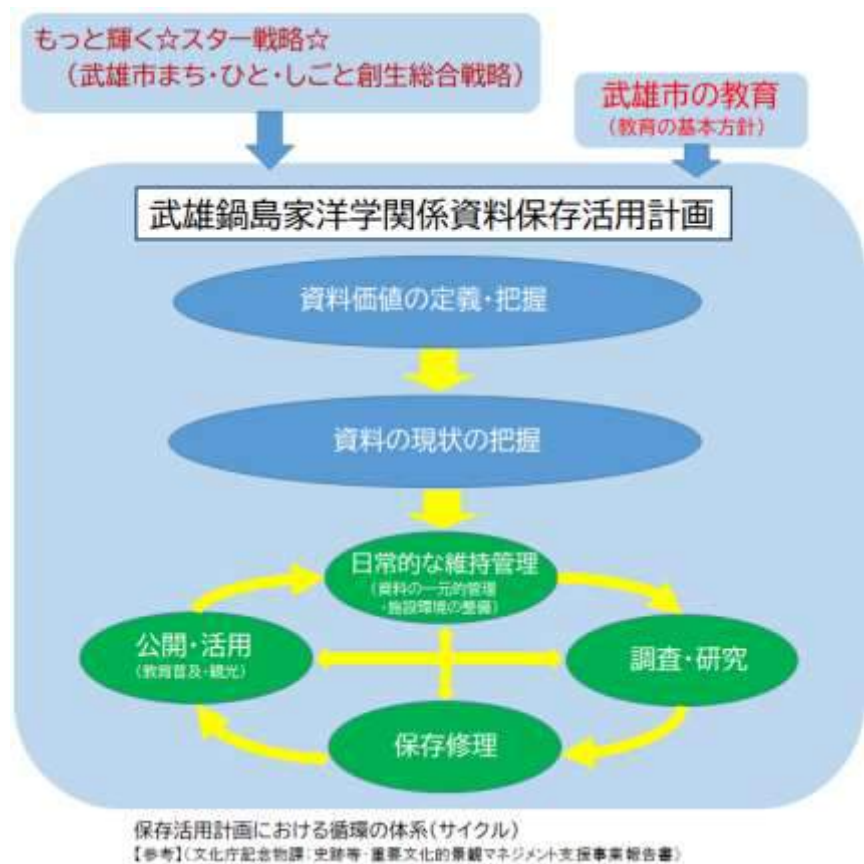
もっと輝く☆スター戦略Ⅱ (令和2年度～令和6年度)	基本目標 ④人と人との交流が生まれ、心がつながるまちをつくる 【基本方向】 西九州新幹線開業を契機に、佐賀と長崎をつなぐ拠点都市として、新たな人の流れと交流の創出を図る。 観光、文化、スポーツ等の分野について、連携した取り組みを推進するとともに、一つの自治体の枠にとらわれず、地域間や経済圏など広域での連携・協働を推進する。 住んでいる人が武雄の魅力を知り、誇りをもつこと、そして、地域と継続的に多様な形でかかわる地域のファンやリピーター等「関連人口」の創出・拡大を図ることが必要である。 国や地域、個人で異なる嗜好を踏まえ、日常の中にある資源や武雄の強みを効果的に「情報発信」することにより、認知度を向上させる取り組みを推進する。 【具体的施策】 (1) 国内・海外誘客の促進 (2) 効果的な情報発信
-------------------------------	--

	(3) 文化・スポーツの振興
武雄市の教育 (令和4年度)	基本目標 Ⅲ 明日につながる伝統文化の承継と多彩な文化の創造 【重点事項】 2 文化財の保護・伝承と活用 〔具体的施策〕 ・国重要文化財 武雄鍋島家洋学関係資料の保存・活用 基本目標 V 郷土愛の醸成と協働する市民総参加による教育の推進 【重点事項】 1 地域のよさや伝統を生かしたふるさと教育の推進 〔具体的施策〕 ・歴史的資源を活かした郷土愛の醸成

「武雄鍋島家洋学関係資料」の保存活用は、本計画をもって完了するものではなく、武雄市のまちづくりや資料の価値、活用方法の新たな展開に応じて、計画自体の見直し・再策定の作業を通じて発展させる必要がある。

以上の点を踏まえ、資料を取り巻く地理的・社会的環境（第2章）、資料の歴史的概況及び指定までの経緯や資料の価値（第3章）をまとめる。そのうえで、過去の状況を含めた資料の現状と課題を整理することにより（第4章）、資料の理想的な将来像の実現に向けた基本方針を明確にする。さらに、

「武雄鍋島家洋学関係資料」保存活用を実施するために必要な事業について検討し、今回の計画期間内に推進する具体的な事業と将来的に考察を要する事項について示す（第5章）。



4 計画期間

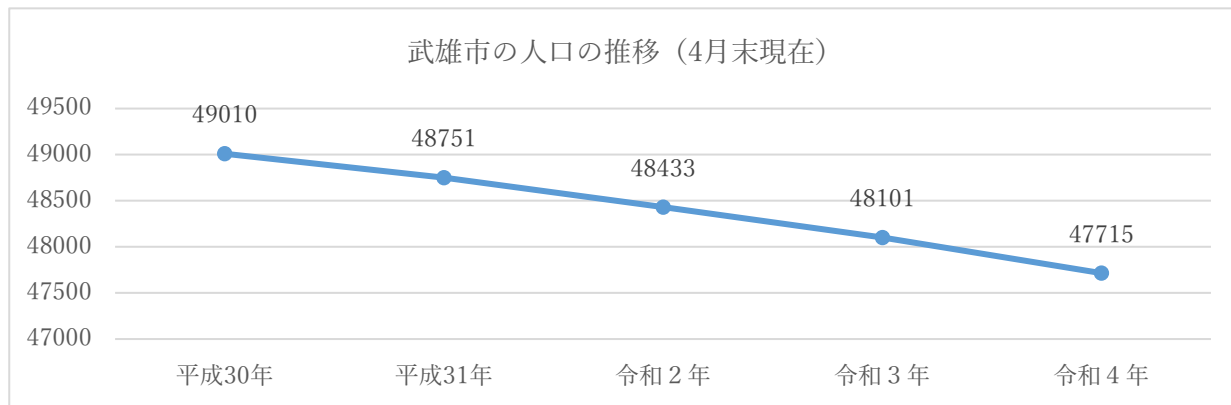
令和5（2023）年度～令和9年度の5か年とする。

第2章 武雄市の概要

1 武雄市の概要

(1) 概要

武雄市は、佐賀県の西部、北緯 33 度 10 分、東経 130 度に位置する都市である。



人口は直近の5年で49,101人（平成30（2018）年）から47,715人（令和4（2022）年）となり、緩やかな減少傾向にある。

平成18年3月1日に、旧武雄市（昭和29（1954）年に武雄町・朝日村・橘村・若木村・武内村・ひがしかわのぼりむら 東川登村・にしかわのぼりむら 西川登村が合併して市制施行）、山内町、やまうちちょう 北方町きたがたちょうの1市2町が合併し、誕生した。

北は伊万里市・唐津市・多久市に、東は杵島郡白石町・大町町に接している。南は嬉野市、および長崎県波佐見町と接し、西は有田町を挟んで長崎県佐世保市につながっている。それぞれの境界には、黒髪山山系・八幡岳山系・杵島山山系・神六山山系がある。

(2) 自然環境

長崎自動車道武雄北方インターを降り武雄の市街地方面に向かうと、目前に3つの峰から構成される御船山みふねやまが眺望できる。周辺には史跡などが多く残されており古くから市民に親しまれている。

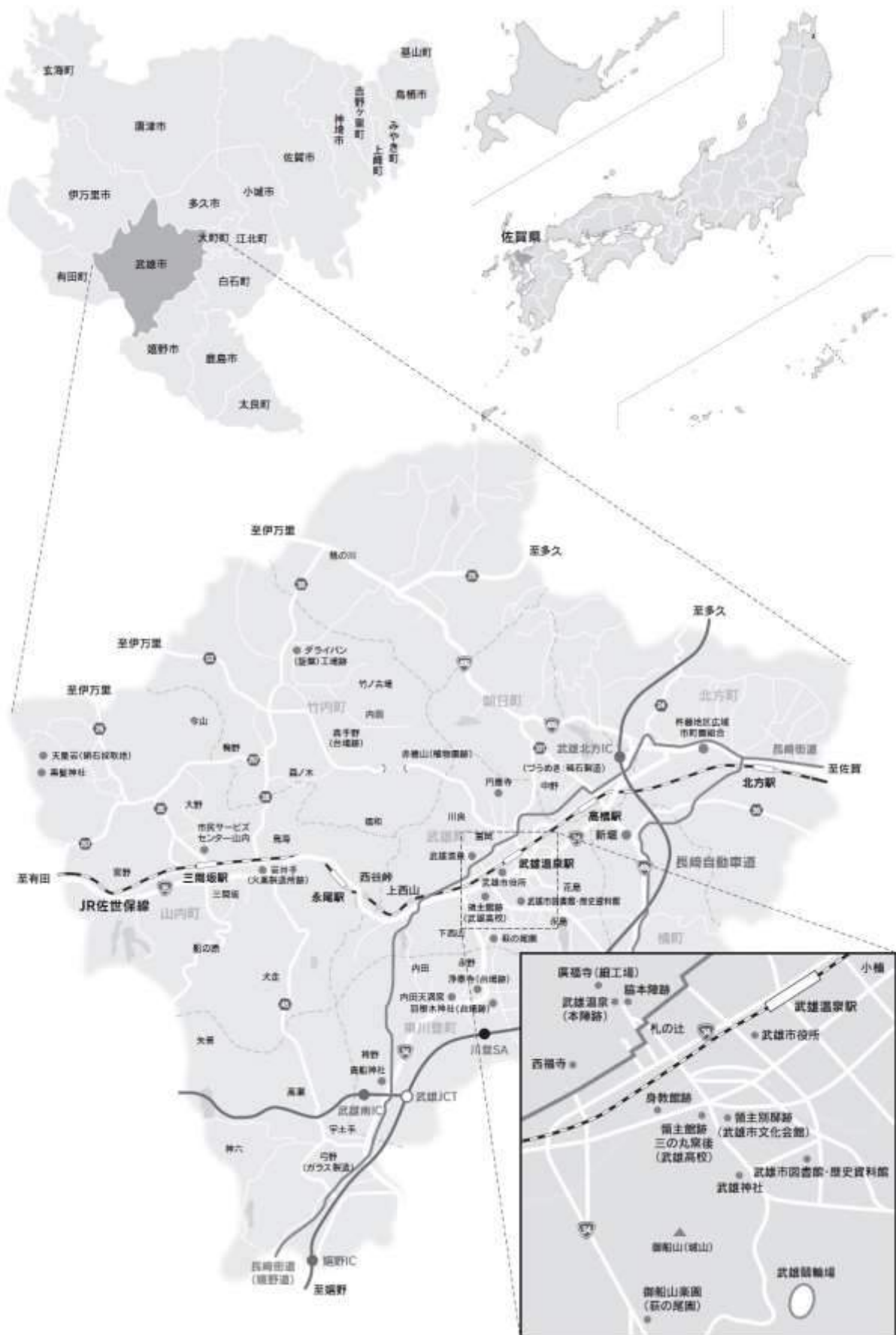
また、武雄市の西端に位置する黒髪山は、県内で最も古い県立自然公園で、古来より霊場として知られている。頂上に露出している天童岩や青螺山せいら南麓との間に雄岩・雌岩などの巨岩がそびえ、迫り来るような景観を見ることができる。

北西部は、武雄市の最高峰である八幡岳や眉山まゆやまが、南部は、日本三大歌垣の1つとして知られる杵島山、南西部は神六山じんろくざん、北東部は徳連岳とくれんだけがそびえ、武雄市の周囲を囲んでいる。

武雄市の河川は、南西から北東へ流れる六角川と北流する松浦川の2つの一級河川とその支流、二級河川塩田川しおたがわの支流・小田志川からなる。2つの一級河川の源流の山である神六山は海拔447mの高さしかないので、流域の保水力が大きいとは言えない。そのような状況の中で、昔から生活用水や農業用水の確保に苦勞してきた歴史があり、そのため殆どの谷に農業用ため池などを造成、その数は市内およそ450か所に及んでいる。

一方、下流域の穀倉地帯は低平地で、低平地河川特有の内水被害に長い間悩まされてきた。決して恵まれているとは言えない自然条件の中で、佐賀本藩領・蓮池藩領・武雄領が混在した三方瀉さんぼうがた（三法方、三法瀉、三方方とも書かれる）と称される地域の水システム（橘町の大日堰や生見の石井樋いし い びなど）や北方町の永池ため池など、現代河川工学も及ばないような河川総合施設（治水・利水・舟運）が、

※註：製本印刷時に西九州新幹線ルートも入れてカラーで作成します。



【位置図】

治水の神様とも呼ばれた佐賀藩士成富兵庫茂安により築造され、この施設は今も活かされている。さらに石井樋の石材は近接する史跡であるおつぼ山神籠石が使われ、永池のため池の東側には永池古墳が残されている。

(3) 社会環境

① 交通

福岡市・佐賀市から長崎市・佐世保市へ通じる九州の主要な幹線ルート（長崎自動車道・西九州自動車道・国道 34 号・国道 35 号・国道 498 号）上に位置している。

江戸時代、小倉から長崎に至る 57 里（約 223.8km）をつないでいた長崎街道は、多くの人々が往来した。武雄領内の道筋は、はじめ、嬉野～塩田～橘（現武雄市橘町）～北方を通る南コースであったが、河川のたび重なる氾濫により通行が困難となることも多かったため江戸中期以降、嬉野～武雄（塚崎）～北方のコースに変更された。

また、鉄道については、明治 28（1895）年の鉄道開業以来、長崎までの沿線上の駅「武雄駅」（現在は「武雄温泉駅」）を中心に市街が発展した。現在は J R 佐世保線上の駅であるが、令和 4（2022）年度には、西九州新幹線（武雄温泉～長崎間）が開業し、西九州における交通の要衝として、今まで以上の期待が集まっている。

② 産業

武雄市の経済を支えるのは観光・農林業・商工業である。

農林業は、多品目にわたる農作物と、全国的に知名度の高い畜産との多種にわたる複合経営が行われている。

商工業では、小規模事業所が多く、企業を誘致するための工業団地の開発など、計画的な誘致と基盤整備事業を行っている。

③ 観光

「いで湯と陶芸の里」として、観光は武雄市の特徴の 1 つでもある。竜宮城を思わせる武雄温泉の楼門（重要文化財「武雄温泉新館及び楼門」）などの観光地における景観は、武雄市のイメージを代表するものとなっている。

江戸時代、塚崎（武雄）は、小倉から長崎に至る長崎街道の宿場の 1 つであった。現在においても市内随所に当時の面影を残しており、日本で最初の種痘に成功したと言われる中村凉庵の旧宅や、敵の侵入に備えるために作られた鍵型道路などが残っている。

また、乳待坊公園や神六山公園、きたがた四季の丘公園など 7 か所の公園は、自然のもつ豊かな資源の活用を通じ市民の憩いの場として、スポーツ・レクリエーションの場として活用されており、今後、観光レクリエーションの場としての活用が図られている。

武雄市では、こうした自然や、先人から受け継いだ文化や歴史、温泉、陶芸など地域の文化的資源などを核とし、「点」で滞在することが多い観光客を、「線」「面」への広がりへつなげ、滞在時間を延ばすことを目指している。



重要文化財 武雄温泉楼門

江戸時代には、長崎街道塚崎宿の本陣がおかれた。

1830年代には、木筒・砲架・車台などの細工場が湯元（武雄温泉）ないしは近隣地にあった。



黒髪山 夫婦岩

古老の言い伝えでは、黒髪山の岩窟で火薬の原料の1つである硝石が採取されたとされる。



長崎街道沿いにある

長崎街道物語公園

（宮野町夢本陣）

白壁に埋め込まれた陶板には、モルチール砲などが描かれている。

(4) 武雄鍋島家の歴史的概要

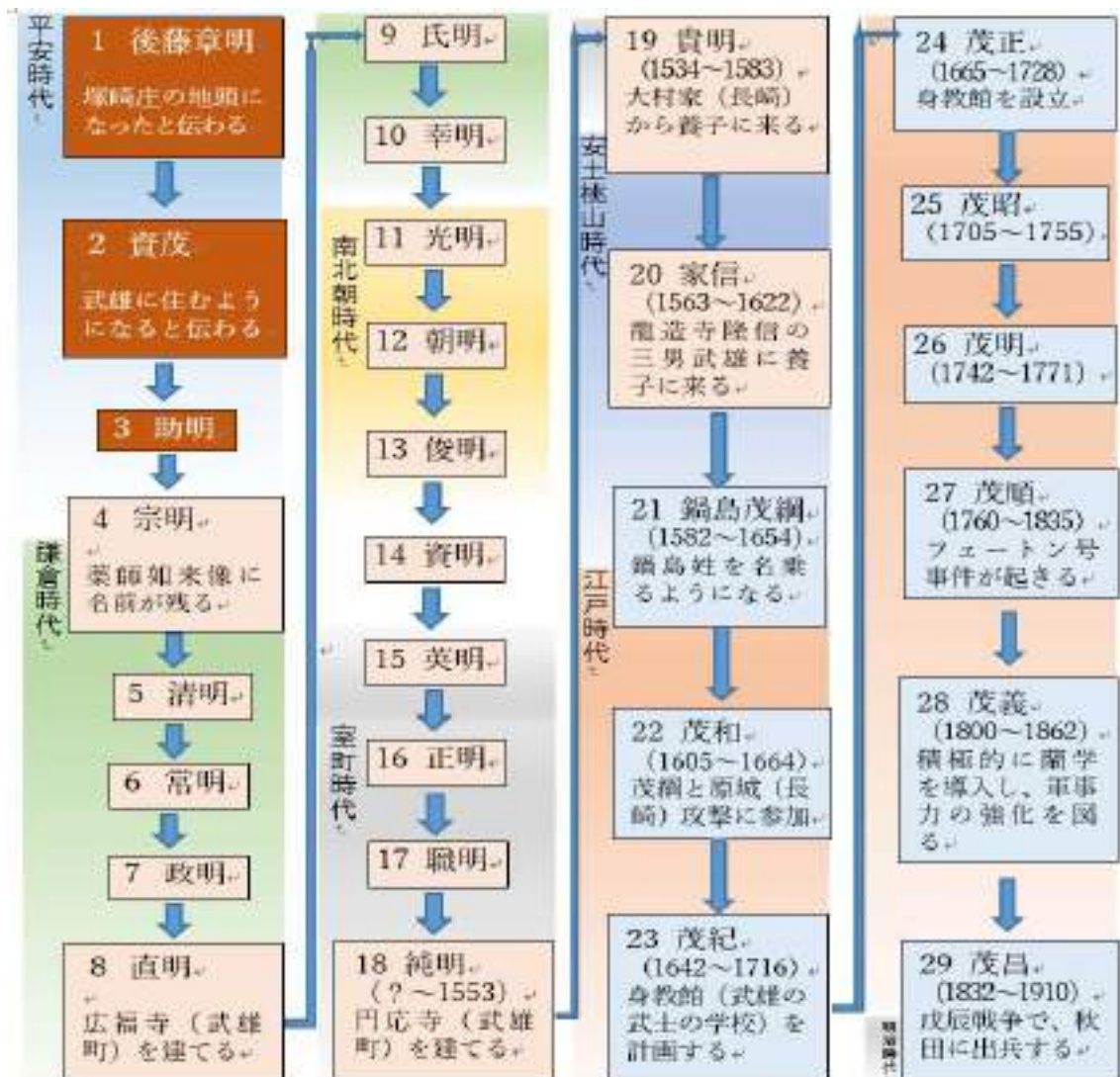
武雄鍋島家の起源は平安時代に遡り、かつては後藤を称していた。10世紀半ばに奥羽地方で起こった前九年の役(1051～1062)で戦功のあった後藤章明^{のりあきら}がその功により墓崎^{つかざき}荘(現在の武雄市の一部。塚崎、柄崎とも記載される)の地頭に任命されたのが始まりとされる。12世紀前半、その子資茂^{ゆかり}が墓崎に下向、富岡村湯里に居住したとされるが、資料で実在が確認できるのは4代目以降である。

この後、後藤家は杵島郡内の有力豪族に成長、16世紀後半の戦国期、19代後藤貴明^{たかあきら}の時、その勢力は最大となったが、一族内の混乱から肥前国を代表する戦国武将龍造寺隆信の勢力下に吸収され、隆信の三男家信を養子に迎えて当主とした。

さらに戦国末期から近世初頭にかけての混迷期、肥前国内の実権が龍造寺氏から鍋島氏へ移行する過程で、後藤家も鍋島氏の傘下に入った。21代茂綱の時には、後藤→龍造寺→武雄と改姓を重ねたものの、寛永11(1634)年からは「鍋島」を名乗るようになった。いかにも江戸時代初期の鍋島政権成立期の不安定な権力構図を映じているといえる。

江戸時代、武雄鍋島家は鍋島藩政のもと、龍造寺系の他の三家、諫早家・多久家・須古鍋島家とともに親類同格に列せられ、「大配分」(自領内での大幅な自治権)を受け、佐賀藩の請役^{うけやく}(家老)をも務める家柄となった。

【武雄後藤家・鍋島家系図】(■は実在を裏付ける資料がない人物、■は後藤姓、■は鍋島姓)



第3章 「武雄鍋島家洋学関係資料」の概要

1 資料の概要

佐賀藩の武雄領（邑）鍋島家に伝来した、江戸時代後期の西洋文物導入期から、戊辰戦争に至る期間の洋学関係の一括資料群である。

文書・記録類は、鍋島茂義（1800～1862）・茂昌（1832～1910）期の武雄鍋島家が収受、作成した文書・記録と、戊辰戦争期を中心とした書状群に大別される。文書は武雄領での洋学摂取や、西洋砲術を核とした近代軍制の整備、火器・銃砲そのほかの輸入機械の注文・購入の覚書類、奥羽出兵時の新政府からの布達・沙汰書、戦線にて往復された、銃砲・弾薬・軍事物資の消費、運搬、補給に関する覚書や士卒の軍中での通行手形等が含まれる。記録は、武雄領士卒の名簿類、長崎貿易での西洋文物や火器・銃砲の注文・購入記録、茂義の手になる舶来植物を模写した図譜類などで、特に天保9年（1838）から文久2年（1862）の長崎貿易の注文書控「長崎方控」4冊には、多数注文品・到来品が記録され、蘭書をはじめ同家が入手した品目が通覧される貴重な資料である。

標本類は、茂義手製の「腊葉」が残される。中国、琉球、ヨーロッパ産の舶来植物を押し花にし、オランダ名を注記する。「ダーデルボーム（ナツメヤシ）」の標本には「嘉永七庚寅」の貼紙があり、茂義の御手元本と推測される。

和書・訳書類は、茂義・茂昌収集の典籍類で、西洋砲術・軍制を中心とした軍事、化学、技術、西洋医学の本が集中する。

洋書類は、蘭書と一部の英書で、百科事典、化学、語学、軍事、医学、物理学、植物学、航海術、機械工学、幾何学、天文学、測量術、理化学機器カタログ等多岐の分野にわたる。

絵図・地図類は、長崎伊王島台場図や戊辰戦争期の戦略的地図等、砲術との関連性が強い。

また図面類は、大砲およびその製造にかかるもので、外国製原図、同印刷図面、同図面写およびわが国で作図された原図またはその写の4つに大別される。この中にはモルチール砲等各種砲の切形類も含まれる。

写真には上野彦馬の写場での撮影と推測される台紙貼写真が残される。

最後に本件を特徴づける器物類は、軍事、天文・測量、科学、その他に大別される。軍事関係の器物では、モルチール砲、試薬モルチール砲、ボンベン野戦砲（施条カノン砲）、ナポレオン式四斤野砲の4門が遺存する。アムステルダムの方ルク工房による地球儀・天球儀一対や、5種の望遠鏡、セキスタント等の天文測量器具のほか、エレキテルも現存する。またランビキや乳鉢・乳棒、ガラス製漏斗、三口ガラス器、白磁製乾溜器等のガラス器や磁器、オランダのフォッケ・メルツァー社製のホクトメートルや、顕微鏡などの実験器具も多数確認されるほか、絵具（ウルトラマリンブルー等）も残されており武雄鍋島家の西洋学術への広範な関心を示す。

以上のように本件は、情報源である洋書・輸入図面、入手或いは需要に係る記録、実物と言う3種の異なる資料を含んでおり、わが国における幕末期の西洋学術・科学技術の受容史において、また軍事技術・兵学の発達史において貴重なまとまった資料群と位置付けられるものである。

「月刊文化財（609号）」（平成26年6月1日発行）より引用
（文中の漢数字は算用数字に改めた）

2 歴史的概要

17世紀半ばに始まる、いわゆる「鎖国」の時代、江戸幕府は、福岡藩と佐賀藩に対して隔年で長崎の御番（警備）を命じた。また、長崎湾内の島嶼は佐賀藩領であったため、ここは独自に警備を行なう義務を課せられた。このため、員数の多寡はあるものの、当番年、非番年を問わず佐賀藩は多くの警備兵を長崎に駐留させることになった。武雄も多久領と共に沖ノ島の警備番を担当している。

武雄の領主鍋島茂義が誕生した19世紀初頭、日本を取り巻く世界情勢は大きく動き始めようとしていた。

文化元（1804）年、ロシア使節のレザノフが長崎に来航、通商を求めた。また、文化5年にはイギリスの軍艦フェートン号が長崎に侵入、オランダ商館員を人質にして乱暴をはたらく事件が起こった。これら異国船の侵入事件は、いずれも佐賀藩の当番年に起こり、しかもフェートン号事件は、佐賀藩の警備の怠慢を曝け出すものであったため、藩主鍋島齊直は幕府から閉門を言い渡された。この失態が藩内に臥薪嘗胆の気概を生み、幕末にかけての佐賀藩活躍の原動力につながった。

文政5（1822）年11月1日、22歳の若さで鍋島茂義は佐賀藩の請役に就任した。

茂義が趣味として絵画を愛好したことは知られるが、武雄に残る絵画資料には、10歳の貞丸（佐賀藩主鍋島直正の幼名）の望みで24歳の茂義が描き与えた絵が含まれる。佐賀藩の請役^{うけやく}という重職にあった茂義は、同時に直正の良き兄貴分^{ちやうひめ}でもあった。

さらに文政10年2月には、直正の姉^{ちやうひめ}寵姫との婚礼が成り、茂義は、実態においても直正の義兄となった。直正の義兄という間柄もあわせ考える時、茂義は、直正に対し長く指導的な関係を維持したものである。

佐賀藩の負担となった長崎御番だが、反面、佐賀藩と蘭学を深く結びつける重要な要因となった。

とりわけ、鍋島茂義は、長崎からもたらされる海外の情報や文物に強い関心を抱き、天保年間（1830～1844）の初め頃から武雄領にこれらを積極的に導入した。武雄に残る武雄鍋島家資料の中で、他地域に残る家資料と比して光彩を放つのは「武雄蘭書」全138冊をはじめとする多くの蘭学資料であり、その資料群の質と量の豊かさはまさに武雄鍋島家資料の核とも言うべき存在として注目される。

天保3（1832）年、茂義は武雄鍋島家の家督を相続すると同時に、家臣の平山醇左衛門を長崎の西洋砲術家高島秋帆のもとに入門させ、その2年後には自らも門下となり武雄領への積極的な西洋砲術導入を開始した。茂義が息子の茂昌に家督を譲り、形の上で領主の地位を退いた天保10年以降も蘭学への興味は続き、武雄に残された蘭書や器物類の蘭学資料はその多くが茂義の蒐集によるものである。

茂義の跡を継いだ茂昌も西洋科学の摂取を進め、特に軍備の増強を図った。武雄鍋島家資料中の慶応2～4（1866～1868）年の「長崎御注文方控」は、茂義が残した「長崎方控」と同様、武雄の長崎での買い物帳で種々の器物・製品の注文がなされているが、世相を反映してか、大砲・小銃など武器の記述が多く見られる。

慶応4年1月、旧幕府軍と新政府軍の間で戊辰戦争が勃発、佐賀藩は新政府軍として参戦した。同年5月、動員命令を受けた武雄の領主鍋島茂昌は出陣の途上、京都に立ち寄り、朝廷から「其方、武術拔群、且つ兵隊精練の趣、天聴に達し、先般御沙汰仰せ出され候處、此度上着、御満足に思召され候」という褒詞の勅諭を受け、同時に激励のしるしに錦の御旗、天杯、軍扇、晒布などを拝領した。800余名からなる武雄隊は秋田へ出兵、旧幕府軍との戦闘にあたった。アームストロング砲など最新の軍備を擁する彼らの活躍は敵・味方を問わず人々を驚愕させた。

関連年表（青字：佐賀藩の動き、緑字：全国の動き）

和 暦	西 暦	月 日	出 来 事
寛政12	1800	10月25日	武雄の鍋島茂義、佐賀の武雄鍋島家屋敷で生まれる
文化元	1804	11月17日	ロシア特使レザノフのナデジダ号が来航、通商要求
文化5	1808	8月15日	イギリス軍艦フェートン号長崎港に侵入
		11月9日	フェートン号事件での警備の怠慢を責め、佐賀藩主鍋島齊直、および佐賀藩に100日間の閉門（謹慎）を命ず
文化11	1814	12月7日	鍋島直正、江戸桜田の佐賀藩邸に生まれる
文政5	1822	11月	鍋島茂義、藩の請役に初めて就任する
文政8	1825	7月15日	異国船打払令
		12月27日	直正 将軍家斉の娘（盛姫）と結婚
文政9	1826	1月11日	シーボルト、江戸参府に同行し武雄温泉に入浴
文政10	1827	2月	鍋島茂義、直正の異母姉寵姫と婚礼の儀
文政11	1827		シーボルト事件
文政12	1829	11月	寵姫逝去
文政13	1830	2月	鍋島直正、佐賀藩第10代藩主に就任
天保3	1832	8月1日	鍋島十左衛門茂義、家督を相続。武雄領主となる
			同月、平山醇左衛門、鍋島茂義の命により佐賀藩から初めて長崎の高島秋帆（四郎太夫）の門下となる
		9月1日	鍋島茂義、長崎御仕組（長崎警備）頭人となる
天保5春	1834		鍋島茂義、最新式の蘭式角石付劔長式火筒（壁石銃）1挺を購入
		9月	鍋島茂義、藩主に同行し長崎へ行く
			鍋島茂義、萩野流砲術師範高島四郎兵衛・四郎太夫へ入門。平山醇左衛門、「御稽古御取次」役となる
		12月	鍋島茂義、「御砲術方御手伝」を組織
天保6	1835	5月9日	鍋島茂義の実弟、坂部三十郎明矩と武雄家臣団33名が連署し、茂義に対して血判起請文「高島流神文納」を提出
		8月6日～11日	高島秋帆、武雄へ来る。領内の処々見分する。日本人により初めて鑄造された西洋式大砲モルチール砲を武雄に持参
天保7	1836	4月14日	鍋島茂義、高島秋帆より「高島流砲術御皆伝」を允許される。砲術皆伝状「萩野流鉄砲目録」が下付される
		6月	鍋島茂義、「御砲術方御手伝」を「御火矢方組」に改編
		10月18日	武雄の儒学者清水龍門、武雄領内で鑄造の蘭筒銘を制作。この頃、武雄で初めて大砲の鑄造に成功
			平山醇左衛門、長崎に出張し、高島より砲術の直伝を受け、高島招聘に尽力する
			この頃、武雄領でガラス製作が始まる
天保8	1837	3月	武雄領内の真手野村（現在の武雄市武内町内）の台場で武雄の家臣団による砲術演習開始
		4月18日	「御火矢方」を「石火矢方」と改称、砲術研究の体制が強化される
		9月16日	高島流砲術の皆伝を受けた鍋島茂義による初めての試打が実現
		9月18日	真手野で武雄家臣団による初めての大規模演習行なわれる
天保9	1838		この年、「長崎方控 二」が書き起こされる
			武雄領内で、木筒による相図玉の打ち上げが盛んに行なわれる
天保10	1839	9月1日	鍋島茂義、家督を子の茂昌に譲る
			この年の末頃、台場を真手野村から永野村（現在の武雄市東川登町）に移す
			蚕社の獄
天保11	1840	9月6日	佐賀藩主鍋島直正初上覧のもと、神埼郡岩田（現在の神埼市神埼町尾崎）で武雄家臣団による大規模西洋砲術演習を実施
			この後、鍋島茂義を佐賀藩の砲術師範に任じ、本藩の家臣たちにも西洋砲術の修行を命ずる
			同月、高島秋帆、幕府に対し西洋砲術採用を進言する「天保上書」を提出
		11月	平山醇左衛門「ベキサンス大砲絵図」を長崎に発注
			清国でアヘン戦争が起きる（～42）

和 暦	西 暦	月 日	出 来 事
天保12	1841	5月9日	武蔵国徳丸原(現在の東京都板橋区高島平付近)で、高島秋帆・浅五郎父子が指揮を執り門弟総勢100名による西洋砲術および洋式軍隊の大演習実施。佐賀藩から武雄の平山醇左衛門、本藩の丹羽作兵衛・永瀬藤五郎参加
天保13		10月	佐賀藩、十五茶屋に「蘭伝石火矢製造所」を置き、大小銃砲の制作を開始。製造方に平山醇左衛門、また、鋳物師も武雄の谷口良三郎が主任として名を連ねる
		10月2日	高島秋帆、長崎で捕縛。揚屋(江戸上伝馬町の牢屋)入りを命ぜられる(長崎事件)
		9月および12月	佐賀藩士の訓練が武雄の永野台場で、武雄の家臣の指導のもと行なわれる
天保14	1843	3月25日	高島流銃陣と備打ちの演習が藩主直正上覧のもと、武雄で行なわれる。訓練参加者は、指図役の平山醇左衛門を除き、本藩藩士により構成
		5月15日	平山醇左衛門捕縛、収監される
		9月20日	藩主直正から武雄の鍋島茂義に対して「蘭砲術稽古人取立、懇ニ教導有之」として褒美の白銀50枚が下賜される
		11月21日	平山醇左衛門、「無調法有之」として、武雄領内白木塞で斬首刑に処せられる
天保15	1844	2月10日	オランダ、ファルク工房の天球儀・地球儀、武雄にもたらされる
		7月2日	オランダ国王開国勅告(パレンバン号来航)
		9月	藩主直正、オランダ軍艦パレンバン号に乗り込み見学。当時、世界最強のボンベカノン(ベキサンス砲)を見る
			この年、佐賀藩、オランダから大モルチール砲購入。伊王島に配備
弘化2	1845	10月	鍋島茂義、ベキサンスの原書『フランス海軍によるボンベカノン試射実験』(1824年刊)を購入。翌年8月までに武雄領抱えの長崎のオランダ通詞西記志十に翻訳させる
嘉永2	1849	8月22日	鍋島直正 嫡子淳一郎に種痘を施す
嘉永3	1850	12月	佐賀藩、城下築地に日本初の反射炉建造に着手
嘉永4	1850		島津斉彬薩摩藩主となり、集成館事業開始
嘉永5	1852	11月	佐賀藩、理化学研究所「精煉方」設置
嘉永6	1853	6月	ペリー艦隊、浦賀に来航
		7月	ロシア使節ブチャーチン、長崎に来航
		8月	幕府、佐賀藩に大砲200門を注文
		9月	佐賀藩、36ポンドカノン砲25門、24ポンドカノン砲25門の合計50門受注
安政元	1854		鍋島茂義、佐賀藩の蒸気船製造主任に任命される
			ペリー 再来航、日米和親条約締結
安政2	1855		この年、ベテルス・レギー艦のオランダ焼物、武雄にもたらされる
			長崎海軍伝習所設置、佐賀藩より大量派遣。武雄から馬場磯吉も参加。
安政5	1858		安政の大獄(～59)
文久元	1861	11月	藩主直正隠居、家督を嫡子直大に譲る。その後閑叟と号す
文久2	1862	11月27日	鍋島茂義、逝去。「長崎方控 五」の記述終わる
慶応元	1865		三重津造船所にて日本初の実用蒸気船、凌風丸竣工
慶応2	1866	8月	鍋島茂昌、佐賀藩請役に就任
慶応3	1867	12月24日	鍋島直正、薩摩藩・長州藩を中心とする討幕軍への参加を決意
慶応4	1868	5月	上野戦争に佐賀藩が出動、アームストロング砲が活躍
		5月27日	「多年西洋砲術研究練兵の趣聞し召され候につき」として武雄領主鍋島茂昌に出兵命令下る。スペンセル後装の7連発銃450挺、レミントン銃100挺、アームストロング砲4門、フランスボーム砲(モルチール砲)2門ほかを装備
		7月17日	鍋島茂昌、参内し天皇に拝謁。「其方武術技群兵隊精練」の勅諭を受け、羽州(秋田方面)へ出動
		11月25日	武雄軍団、武雄へ凱旋
明治4	1871	1月18日	鍋島直正(閑叟)、逝去
		11月12日	岩倉米欧使節団、横浜を出港。武雄出身の山口尚芳が副使として参加する
明治7	1874	2月	佐賀の乱が起こる
明治43	1910	3月15日	鍋島茂昌、逝去

3 重要文化財指定までの経緯

昭和 44(1969)年、武雄鍋島家邸(旧別邸地)と庭園を含む不動産を武雄市が旧領主武雄鍋島家から購入した際に、敷地内の土蔵に収蔵されていた多数の貴重資料が武雄市に寄贈された。土蔵は老朽化しており、雨漏りや虫害、埃などにより、収蔵されていた資料が損傷・劣化していたが、昭和初期に武雄鍋島家当主であった男爵鍋島綱磨により整理された状況で散逸することなく保管されていた。

母屋も老朽化していたこともあり、武雄鍋島家邸はその直後に解体され昭和 50 年現在の武雄市文化会館(所在地：佐賀県武雄市武雄町大字武雄 5538 番地 1)が建設された。資料を収蔵していた土蔵は、現在もこの敷地内の庭園の一隅にその姿をとどめている。

武雄に残されたこれらの貴重資料は、武雄市文化会館建設後、館内の 3 つの部屋に分散して保管された。土蔵から直接移されたのではなく、一時的に旧武雄市役所庁舎(所在場所：佐賀県武雄市武雄町大字昭和 1 番地 1)近くの倉庫に移され整理をされたようだが、移動の時期など、その詳細は不明である。

3 つの部屋は、もともと研修室・会議室として造られたスペースであり、一方の壁の面積の 2 分の 1 以上を占める窓があることに加え、西日が当たる外壁に面している部屋があるなど、収蔵環境として十分とは言えなかった。

武雄鍋島家からの寄贈資料は、平成 12(2000)年、収蔵環境・展示環境を整えた武雄市図書館・歴史資料館の完成にともない、同館の特別収蔵庫に



文化会館庭園と土蔵



市民の浄財で文化会館庭園に建立された鍋島茂義銅像

移し、同年 10 月 1 日の開館により一般に公開するに至った。

ただし、「武雄の蘭書」と称される、洋書を中心とした 138 冊の典籍は、昭和 12 年には武雄鍋島邸内にあったことが、有馬成甫氏の『武雄の蘭学』（昭和 37 年刊行）に記されている。昭和 30 年代に、鍋島家当主の意向で、佐賀県立武雄高等学校の図書館に移されたが、平成 10 年 6 月、武雄市図書館・歴史資料館の建設を受けて武雄市に寄託され、一時的に武雄市文化会館内に保管した。その後、他の資料と共に歴史資料館の特別収蔵庫に移し、平成 20 年 9 月に武雄市に寄贈されている。

これらの資料は、すでに昭和 53 年から、武雄市出身で、当時、九州大学文学部助教授であった中村質氏(故人)を中心に丹念な調査が実施され、『武雄鍋島家文書目録』（武雄鍋島文書目録調査事業 昭和 53 年度～55 年度）にまとめられた。さらに、佐賀大学教育学部教授であった米倉利昭氏（故人）を主任調査員とした武雄鍋島家歴史資料目録調査事業で『武雄鍋島家歴史資料目録(前編)』（昭和 56 年度）、『武雄鍋島家歴史資料目録(後編)』（昭和 57 年度）が整理された。いずれも国・県の調査指導と補助金を受けた事業である。昭和 63 年度には、補完篇としての『武雄鍋島家歴史資料目録(続編)』が武雄市教育委員会により刊行された。

資料総数は合計 16,386 件を数え、その内訳は、「文書関係」が 3,349 件、以下、「絵図・地図関係」163 件、「書籍(和書)」8,007 件、「書籍(漢籍)」2,446 件、「歴史資料関係」2,218 件、「設計図関係」65 件、「武雄の蘭書関係」138 件となっている。

いずれも武雄鍋島家において長い年月にわたり保管されてきた来歴を有する貴重な資料であるため、武雄市図書館・歴史資料館開館当時から、資料の来歴を明らかにする意味で、武雄鍋島家資料として、その他の寄贈、寄託、購入による資料と区別し、呼び分けることにして今日に至っている。

平成 26 年 8 月 21 日、武雄鍋島家資料のうち、蘭学・洋学に関連する資料が「武雄鍋島家洋学関係資料」1 件（2,224 点）として国の重要文化財としての一括指定を受けた。

重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」の価値

川副 義敦

武雄では、およそ天保年間(西暦 1830～1845 年)中期頃から、西洋の学問(洋学)として蘭学の導入を積極的に行ってきた。その背景には、江戸時代前期の寛永 19(1642)年以来、佐賀鍋島藩と福岡黒田藩が隔年で担当した、西洋に向けて唯一開かれた貿易港長崎の警備(御番)があった。

とくに、19 世紀に入ると、蒸気船が発明され、航海時間が短縮、航行距離も延長したことから、西洋諸国の船が日本近海にも頻繁に出没するようになった。こうした事情を反映して、武雄では長崎警備との関係からいち早く西洋世界に接近し、蘭学(洋学)の導入を開始した。その動機が、多くの洋学関係資料が武雄に残されることにつながった。本来は、長崎、ひいては日本防衛のための西洋砲術や調練の研究が発端であったが、徐々にその興味や必要の幅も広がり、様々な方向へと展開した。

かつて、有馬成甫氏は『武雄の蘭学』（1962 年 武雄市教育委員会）で、「武雄の蘭学は、結局、佐賀藩の蘭学の先駆となりその成果を挙げたとみるべきである」と記した。

その評価は、半世紀以上を経た今日もなお色褪せることはなく、むしろ、その評価を後押しする多くの成果を生んでいる。「武雄鍋島家洋学関係資料」の重要文化財指定がその証左でもある。その数 2,224 件におよぶ一大文化財群である。

加えて、有馬氏は、武雄に残る三つの興味ある事績として、平安時代中期以来土着した後藤氏（鍋島氏）が現在も連綿として続いていること、武雄神社が古い由緒とともに多くの古文書を所有していること、加えて「逸早く天下に先んじて 19 世紀の西洋文化を採り入れた記念物がよく保存されていること」として武雄の洋学資料群を挙げている。

まさに、今に残る 138 冊の武雄蘭書や、モルチール砲をはじめとする西洋砲術と西洋式軍隊訓練関係の資料、武雄のサイエンスを象徴する天・地球儀、望遠鏡や理化学実験器具などの数々、さらに武雄の洋学研究の延長上にある戊辰戦争の関係資料など、重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」は、全国に分布する洋学資料の白眉である。

武雄蘭書の分析から研究者らが「(武雄領では)購入した原書の内容を理解し、必要に応じて翻訳させていたことがわかった」と評するように、蘭書に限らず、武雄に残された資料の大半は、闇雲に集めたものでも偶然に集まったものでもない、武雄で行われた西洋文明、文化の調査と研究が、さまざまに連関をもって蒐集され、時代を越えて今の武雄に存在するのである。

重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」は、いささか乱暴な分け方かも知れないが、大別すれば、西洋渡来の文物とそれに関連するものと、戊辰戦争関係の資料に大別される。言い換えれば、武雄の領主鍋島茂義と、その子茂昌の時代に蒐集された文物や文書類が中心を占めている。

それら資料群のなかでも注目を集めるのが、四冊の小冊子からなる「長崎方控」である。一冊目が存在すると推測されるが、行方が分からず、二冊目から五冊目までが残されている。年代も天保 9（1838）年から文久 2（1862）年までの 25 年間におよぶ、武雄の蘭学導入の記録である。

この「長崎方控」を丹念に紐解くことで、鍋島茂義を中心とする武雄の洋学(蘭学)研究の展開を体系的に把握することが期待できると言える。

実際に、「長崎方控」は、各冊の前半部に、一年ごとに文物の注文月日が記され、また後半部にはそれらが武雄にもたらされた月日が記されている。それゆえ、武雄に数多く残された西洋渡来の文物類について、その履歴が確認できるものが多い。文字で記された資料があり、その実物が現在まで残り、しかもその導入の年月日までが判明するという驚くべき事実である。名前が分かり、モノがあり、履歴が残されている。名前・モノ・履歴の三者が確認できるのである。このことだけでも極めて稀有なことだと言えようが、それが一つや二つのモノにとどまらないという事である。

「長崎方控」は、文久 2（1862）年の鍋島茂義の死によって記述を終えるが、その続編というべき資料が、「長崎御注文方控」(それぞれに表題は異なる)と総称される三冊の冊子である。慶応 2（1866）年から慶応 4（1868）年までの記録で、茂義の子茂昌の時代である。

武雄における地道で熱心な洋学導入の軌跡。一つ一つの努力の積み重ねがあって、江戸時代後期の貴重な武雄の資料群が形成されたと言える。

これら多くの文物に資料的な価値を予測し、今日まで残してきた武雄の先人らの見識に敬意を表すべきである。

江戸時代後期、武雄邑(領)で始まった西洋の砲術・軍事研究、蘭学の導入、そしてその延長線上にある、戊辰戦争で羽州(秋田・山形地方)への武雄軍団の出動。その背景を評価して、多数の戊辰戦争関係の資料までが重要文化財に指定された意義も大きい。

重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」。この価値ある資料群が、国の宝として、武雄や佐賀のみならず、幕末日本の洋学史研究、科学技術史研究の分野での幹となると確信する。

今後の精華を大いに期待したい。

第4章 現状と課題

1 施設の概要について

(1) 資料の収蔵・展示施設について

施設の名称・所在地：武雄市図書館・歴史資料館（佐賀県武雄市武雄町大字武雄 5304 番地 1）

施設の概要

○本館

敷地面積	10,160 m ²	
建築面積	3,352 m ²	
建築延床面積	3,807.3 m ²	
構造	鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造・木造）一部地上2階	
開館日	平成12（2000）年10月1日 大規模改修 平成25（2013）年4月1日 （工事に伴う閉館：平成24年11月1日～平成25年3月31日）	
資料館エリア の概要	〔展示施設〕	
	蘭学・企画展示室	
	企画展示室	162.8 m ² 独立防火区画 構造：鉄筋コンクリート造、一部内壁・木クロス貼 展示ケース：木造・内壁クロス貼 ガラス引き戸（28 m ² ） ガラス片開き戸〔セミエアタイト〕（10 m ² ）
	メディアホール	142.8 m ² 付属倉庫 20.0 m ² 構造：鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造・木造）
	こども歴史コーナー（平成29年度に設置） 開架スペース内造付展示ケース 9.8 m ²	
	※常設展示室「蘭学館」（252 m ² ）は平成24年10月31日で閉鎖	
	〔収蔵施設〕	
	構造：鉄筋コンクリート造、独立防火区画、一部耐震壁	
	特別収蔵庫	90.2 m ² 内部板張り 24時間温湿度管理
	一般収蔵庫	2層 延床面積：253.7 m ² 24時間空調
	その他	通路 30 m ² 燻蒸室 13.2 m ²
	〔その他〕	
	事務所	22 m ²
	作業室	15 m ²

○こども図書館（歴史資料館関連施設なし）

敷地面積：1,439 m ²	建築面積：614 m ²	建築延面積：691 m ²
構 造	鉄筋コンクリート造（一部木造）地上2階	
開館日	平成29年10月1日	

※註：製本印刷時に体裁を整えて製図します。

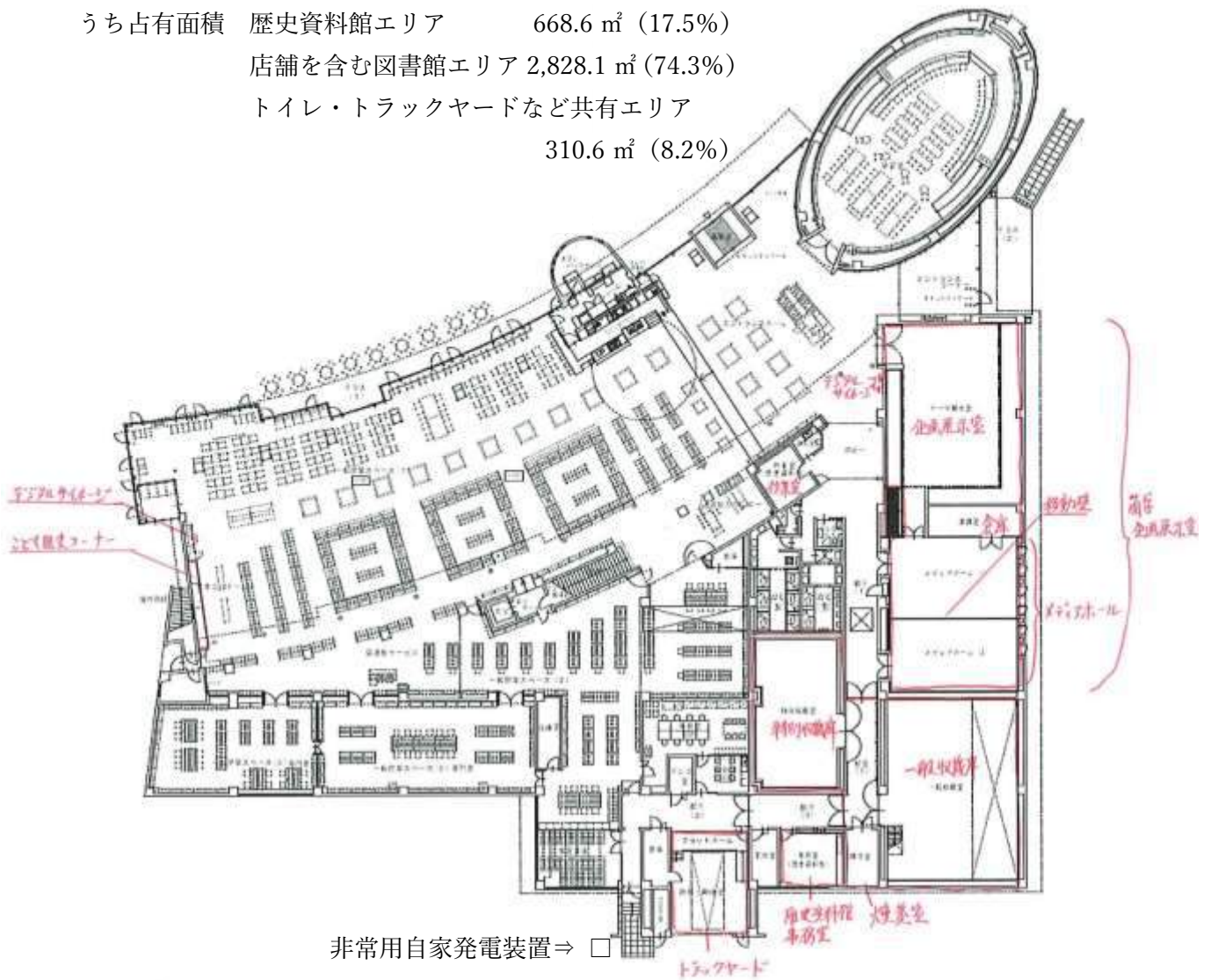
武雄市図書館・歴史資料館本館 建築延床面積 3,807.3 m²

うち占有面積 歴史資料館エリア 668.6 m² (17.5%)

店舗を含む図書館エリア 2,828.1 m² (74.3%)

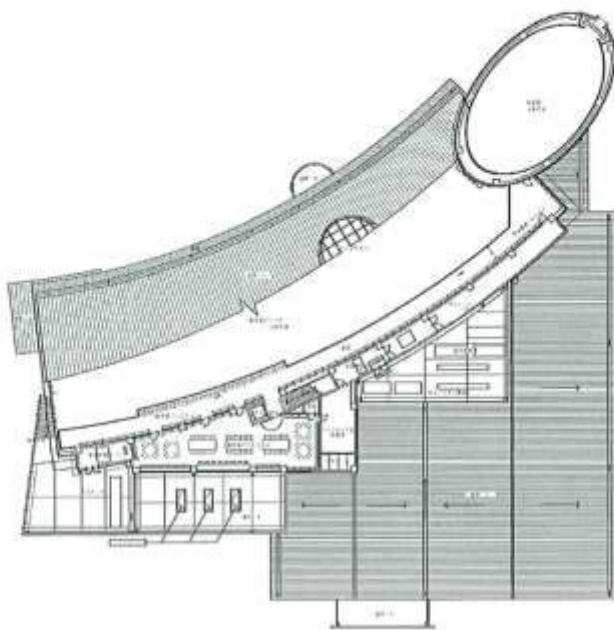
トイレ・トラックヤードなど共有エリア

310.6 m² (8.2%)



非常用自家発電装置⇒ □

武雄市図書館・歴史資料館
一階・二階平面図
(要加工)



【館内図】

(2) 施設の特徴

○ 全体的な特徴

武雄市は平成の大合併前、平成元（1989）年度に「第三次武雄市総合計画」を策定した。これに基づき平成6年度に策定された「市民文化の森構想」で謳われた「文化の薫るまちづくり」の実現に向けて、武雄市図書館・歴史資料館が整備された。武雄市固有の歴史的遺産・風土の保存と活用、未来への伝承を行う場であること、市民参加の様々な活動の拠点であること、図書館と歴史資料館の相乗効果を活かした複合施設であることなどを目指し、平成12年10月に開館した。

開館から12年後の平成24年11月より翌年3月にかけて、図書館への指定管理者制度導入を前提に、一般開架スペースの拡大、館内に書店やカフェを設けるなど、施設の魅力を高める大規模改修を実施した。平成25年4月のリニューアルオープン後は、市民のための図書館として休館日を設けず、館全体は午前9時から午後9時まで開館している。

令和2（2020）年に開館から20年を迎え、市民のみならず多くの人に親しまれる施設となっている。大規模改修以降、書店やカフェの併設により観光客を含めた来館者は増加し、平成30年度には、こども図書館とあわせて、年間来館者が100万人を超えた。観光スポットの1つとして観光ウォーキングルートに組み込まれていることなどから、中国・韓国を中心とした外国人の来館者も増加している。ただし、令和2年より新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により、来館者数は減少している。

書店やカフェは図書館エリア・歴史資料館エリアと同一フロア内にあり、飲食物を含む物販が行われている。飲み物は蓋つきのものであれば館内で自由に飲むことができるが、食事はカフェ内に限られる。

歴史資料館エリアの蘭学・企画展示室では、全ての飲食物の持ち込みを禁止しており、各入口などに目立つように表示している。さらに、企画展期間中は展示室内に常時人員を配置し、入場者へ協力を呼びかけている。また図書館エリアにおいても、佐賀県や武雄市と関連がある書籍、特に発行年が古い、小部数発行などの貴重な書籍を閲覧する郷土資料の閲覧席については他のエリアと区別して、飲食禁止を徹底するために厳格な管理を行う対象として位置づけている。

○ 歴史資料館エリアの特徴

武雄市図書館・歴史資料館は複合施設であり、さらにワンフロアであることから、図書館の利用を目的とした来館者であっても歴史資料館の展示室に誘導しやすい構造となっている。

開館当初には歴史資料館エリアとして、蘭学資料の展示を中心とした常設展示室「蘭学館」（252㎡）、テーマを定めた展示替えを行う企画展示室（162.8㎡）、年表や動画で通史を紹介する情報コーナー（34㎡）が設けられていた。

常設展示室・情報コーナーについては展示が固定的で、市民の利用が低迷していたことから、平成24～25年の改修時、常設展示室は現代の文化を発信する場として、情報コーナーは来館者の憩いの場として活用されることとなり、展示スペースは約45%減少した。

この改修以降は、企画展示室及び隣接するメディアホール（多目的スペース）をあわせ、「蘭学・企画展示室」とした。床面積は305.6㎡あり、移動壁を用いることで企画展の規模によって構成を変更することができる。

その後平成29年に、図書の閲覧スペースの拡充を求める市民のニーズに応えるため、かつての常設展示室はイベントの開催も可能な閲覧スペース、シェアルームとして再改装を行った。

また、図書館エリアの一般開架スペース拡大のために、事務室の縮小など収蔵施設を除く図書館及び歴史資料館のバックヤードスペースは、3分の1程度に減少した。

平成29年10月、武雄市図書館・歴史資料館に隣接して武雄市こども図書館が開館するのにあわせて子ども用図書コーナーを一部改修し、子どもたちに歴史を紹介するためのスペースとして、新たに歴史展示ケース(9.8 m²)を設置した。照度や温湿度の設定や、歴史資料館の開館時間に合わせた展示調節ができないことから、環境の影響を受けにくいやきものなどの資料やパネルを用いて、テーマを定めた展示を行っている。

武雄市図書館・歴史資料館は本章に述べるとおり、文化財の保存と管理、公開を安全かつ適切に行っていく上で、収蔵庫のスペース、資料動線、防火防犯対策に関する課題がある。また、「武雄鍋島家洋学関係資料」の常設展示が可能なスペースがないこと及び現状の展示設備の温湿度調整などについても課題を残す。中・長期的な計画のなかで、大規模改修、建替などを視野に入れながら、課題解決の方策を探っていく必要がある。

(3) 施設周辺の環境

武雄市図書館・歴史資料館の西側には、武雄市のランドマークである御船山(標高207m)がそびえる。その東麓には、1000年余の歴史をもち、佐賀県内最古の古文書「四至実検状」を含む「武雄神社文書」(重要文化財)を有する武雄神社が鎮座している。神社の御神木「武雄の大楠」(武雄市天然記念物)は武雄が誇る3本の大楠のうちの1つであり、幹回り20m、樹高30m、樹齢3000年ともいわれる威容で、人気の観光スポットとなっている。館の北側には流鏑馬道がある。武雄神社の秋祭りである武雄供日では、10月23日に流鏑馬が奉納される。この行事は、平家追討の祈願を行った武雄神社に深謝した源頼朝が送った使者が武雄領主と共に武雄神社に参詣し、神事が終わったあと流鏑馬を奉納して神慮を慰めたことから始まったとされる。

御船山北麓に位置する佐賀県立武雄高等学校は、武雄後藤家の居城であった塚崎城(武雄城)址に建てられており、山中には現在も本丸の石垣などの遺構が残る。

また、館の北西約150mに位置する武雄市文化会館は、慶応年間(1865~1868)に築造された武雄鍋島家の別邸跡である。庭園などに当時の面影を残す一方、ホール、会議室、集会室、調理室、美術室、工作実習室など、幅広い活動に対応した複合施設として、地域文化の育成拠点の1つとなっている。館北側の小丘陵には、3本の大楠の1つである「塚崎の大楠」(武雄市天然記念物)があり、さらに北へ行けば(館より徒歩20分程度)「肥前国風土記」にも記された武雄温泉、東京駅などを設計した唐津出身の建築家辰野金吾の設計による武雄温泉新館及び楼門(重要文化財)も立地している。

御船山南西麓には、弘化年間(1844~1848)に築造された「萩の尾園」の池泉庭園を基礎として発展し、国の登録文化財(記念物)であり佐賀県名勝の「旧武雄邑主鍋島氏別邸庭園(御船山楽園)」がある。南東麓側には、世界的建築家フランク・ロイド・ライトの弟子遠藤新が設計した国際交流、研修・会議施設で、国の登録文化財(有形文化財)の「如蘭塾舎及び寄宿舍」「如蘭塾迎賓館」が立地、その附属施設として整備され、現在は市民の憩いの場や観光名所となっている御船が丘梅林が広がっている。

このように、文化・学習・交流の中核施設が集積し、隣接して豊かな自然環境と歴史的景観に恵まれている一帯は、市民の心のふるさととなり、武雄の良さを再発見できる場であるといえる。

2 資料の保存・管理について

(1) 資料の管理など

「武雄鍋島家洋学関係資料」は、第3章の「3 重要文化財指定までの経緯」で述べた4冊の武雄鍋島家資料の管理目録に大半が掲載され、収蔵庫内における収納などは、この管理目録を元に整理している。

しかしながら、画像を含めた資料の概要、現状・修理履歴・展示履歴などを俯瞰できる台帳はできていない。

武雄鍋島家資料は、大砲や石臼など法量や重量などの関係で一般収蔵庫に収蔵しているものを除いて、特別収蔵庫に収蔵している。

資料のうち、文書・典籍類、写真、標本類については、目録の作成時に管理番号を記したラベルを資料に貼付の上、管理番号・資料名などを記した封筒に収め、コンテナに縦置き状態で収納している。この時の封筒は酸性紙であったため、平成元年、資料の修理が始められた後に、中性紙の封筒に入れ替えた。平成27年以降の保存修理事業に際しては、資料に貼付されたラベルは剥がして別置している。

器物類は、管理番号を記した荷札を付け、サイズに応じてコンテナに収納したものと棚に直置きにしているものがある。

図面・絵図類は、修理が済んだものは収納箱を作成し、箱に管理番号を記している。修理前のものについては、中性紙の封筒に入れ、コンテナに収納している。

洋書類は、1冊ごとに専用の中性紙箱を作成して収納し、箱に管理番号を記している。棚の一部をスライド本棚形状に改造し、立てた状態で保管している。多くの資料の扉裏などに、武雄市に寄贈される前に貼付された青焼きのタイトル（訳文）が残っている。



令和2年度保存修理

5. 絵図・地図類 13～24

薩州鹿児島見取絵図 収納箱



特別収蔵庫内 資料収納状況

※写真中央の棚下段に、薩州鹿児島見取絵図
収納箱がある

(2) 保存修理事業

文化財修理の目的は文化財を将来に伝えることである。そのためには当該文化財の文化財価値を体現する品質・形状を見極め、文化財を構成する素材の物性についての理解を必要とし、今後の保存に万全を期すことが求められる。同時に、劣化、損傷状況と要因を認識し、その箇所を極力取り除くことが必要になる。

「武雄鍋島家洋学関係資料」は主として紙・絹・木など極めて脆弱な素材にて作成されていることから、不適切な材料や工程による修理がなされれば、その行為は一転して文化財破壊となり、とりかえしのつかないこととなる。現状を極力維持すること、将来に再修理できることなどを念頭に極めて慎重に安心・安全な材料と工法を検討するとともに、極めて高度な修理技術により施工されなければならない。

以上の点から、文化財修理には、文化財修理倫理をもつことを前提とし、対象となる国指定文化財の文化財分野に即した修理に関する豊富な経験と実績を有するものによる施工が求められる。

「武雄鍋島家洋学関係資料」は現在地に収蔵して以降、資料の劣化を招く温湿度、有害光線、有害生物、有害物質などに関しては、概ね良好な保存環境におかれているが、それ以前の収蔵環境下において、大きな損傷を受けているものも少なくない。

平成元（1989）年度より、武雄鍋島家資料の修理を実施してきた。平成 26 年以降は、より適切な修理を施すため、文化財保護法第 34 条の 2 及び第 35 条、第 43 条の 2 に則り国庫補助と県費補助を受け、平成 27 年～令和 6（2024）年の 10 年計画で、文化庁などの指導を受けながら、保存修理事業を進めている。

現在行っている保存修理事業のうち、文書・記録類と和書・訳書類の一部については、平成 27 年度以降の作業により、資料の傷み具合でランク分けをし、展示などの活用機会の多寡などを加味して対象とする資料を定めている。

文書・記録類については、専門家による状態確認と同時に記載内容の確認を進めてきた。砲術の導入などに関連する軍事関係の文書、戊辰戦争関連の文書は、85%程度の確認作業が終了している。指定外の武雄鍋島家資料の確認作業も、追加指定を視野に入れて進めているところである。

絵図・地図類については、順次の状態確認調査は実施していない。ただし活用頻度が特に高いと判断した一部については、保存修理事業の対象としてきた。その際、担当者の目視では確認ができなかった膠の劣化による顔料の剥落などの問題が指摘されている。

洋書類は、佐賀県立武雄高等学校図書館に保管中の平成 3 年 9 月に襲来した台風 17 号・19 号による漏水などのため、39 冊の原装が失われ仮表紙が施されている。武雄市に寄託された平成 10 年度の修理の際、表紙カバーとして貼付されていた塩ビフィルムを除くとともに、フィルム貼付に用いられた粘着物質、カビを除去。製本構造が傷んでいるものや綴じが外れている資料はいったん解体し、背や背貼りが傷んでいるものを修理したうえで綴じ直しを行った。また、丁のヤブレを同色系統の和紙を用いて補修し、表紙の破損についても修理を行い、個別の中性紙保存箱も同時に制作した。未指定時における応急処置として実施されたものだが、国指定文化財になった現段階ではより適切な修理が求められる。また本紙に水濡れ痕などがある資料、前回の修理から時間が経過していることで装丁の皮革部劣化が見られる資料がある。

一方で、「武雄鍋島家洋学関係資料」の特徴をなすといえる、器物類（ガラス・革製品など）及び標本類については、分野、素材・材質、用途などが多岐にわたり、文書類に比べて全国的にも修理実績が少ない。適切な修理方法、実績がある修理技術者の選定など多くの課題がある。このため、修理に

至る詳しい調査を実施できておらず、修理が急がれると推測される資料もあるが、個々の資料に対する最適な修理方法が明確になっていない。

【保存修理事業の対象資料】

3 和書・訳書類 14 規矩元法町見目録間書 【平成 28 年度】



修理前



修理後

1 文書・記録類 745 書類（蘭砲術稽古人数）【平成 30 年度】

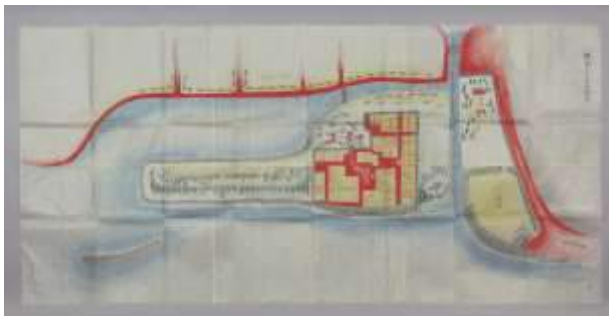


修理前



修理後

6 絵図・地図類 14 薩州鹿児島見取絵図/鑄製方見取略図 【令和元年度】



修理前



修理後

「武雄鍋島家洋学関係資料」に係る指定以前の保存修理実績一覧

年度	資料名	指定番号	管理番号 (「武雄鍋島家文書目録」「武雄鍋島家歴史資料目録」による)	施工業者
平成1～2年	大砲設計図 65点	図面類 1～37、59～86	設計図 1～65(後編)	株式会社岡墨光堂(京都市)
平成2年	(仮)蒸気機関の図	図面類 99	続編 二-304	株式会社岡墨光堂
	船関係	図面類 100、101	続編 二-307	
	大砲関係図面	図面類 102	続編 二-316-1	
	大砲関係図面	図面類 103	続編 二-316-2	
	大砲関係図面	図面類 104	続編 二-316-3	
	大砲関係図面	図面類 105	続編 二-316-4	
	大砲関係図面	図面類 106	続編 二-316-5	
	水車の図面(プレットモ—レン)	図面類 159	続編 二-317	
平成6年	練率訓語 8冊	和書・訳書 216～223	前編 四-3-10	坂田墨珠堂(滋賀県大津市)
	モルチール業大略 4紙	文書・記録類 89～91	文書 I-120	
	大砲切形六門分外 うち17枚		文書 I-121	
	大砲切形入 10枚と1綴のうち色絵1枚	図面類 41～58	文書 I-121-2	
	ホウイッスル筒台絵図他 27枚のうち26枚	146～131	文書 I-122	
	ホウイッスル筒台絵図他絵図 全22枚+蘭文説明1綴		文書 I-122-2	
平成8年	長崎御仕与二付而仰出	文書・記録類 18	文書 I-47	坂田墨珠堂
	(仮)茂昌長崎滞在記録	文書・記録類 790	文書 I-56	
	(仮)蘭製御筒	文書・記録類 855	文書 I-65	
	書状	文書・記録類 1283	文書 I-66	
	ホウイッスル並台絵図	図面類 38	文書 I-101	
	當流鉄砲打覚書	文書・記録類 713	文書 I-127	
	文化七年九月五日於田上萩野流鉄砲	文書・記録類 715	文書 I-128	
	萩野流砲術町打細工留	文書・記録類 869	文書 I-129	
	(仮)砲術書写	文書・記録類 798	文書 I-138	
平成9年	萩野流孟夜相図打極秘巻 1冊	和書・訳書類 261	前編 四-1-106	坂田墨珠堂
	御褒美帳 1冊	文書・記録類 725	文書 F-11	
	(仮)砲術書写 1冊	文書・記録類 858	文書 I-73	
	長崎絵図	絵図・地図類 2	文書 O-32	
	長崎伊王島の図	絵図・地図類 3	文書 O-33	
	長崎神之島の図	絵図・地図類 4	文書 O-34	
	東西半球図	絵図・地図類 7	文書 O-42	
平成10年	牛痘発蒙	和書・訳書類 104	前編 三-2-24	坂田墨珠堂
	失物児杜経験方	和書・訳書類 106	前編 三-2-31	
	連邦志略(2冊)	和書・訳書類 128、129	前編 二-4-1	
	海外新拾遺	和書・訳書類 125	前編 二-4-9	
	銃陣詳節	和書・訳書類 194	文書 I-71	
	散花錦囊	和書・訳書類 71	前編 三-2-25	
	覚	文書・記録類 129	文書 I-168	
	(仮)覚(包みあり)	文書・記録類 87	文書 I-76	
	玉葉放出奉願候口上覚(包有)付属品1枚	文書・記録類 170	文書 I-149	
	(仮)幕末出勢帳	文書・記録類 591、667	文書 I-217	
	武雄の蘭書 138冊	洋書類 1～133 和書・訳書類 1、4、6、7、188	武雄の蘭書 1～138(後編)	

年度	資料名	指定番号	管理番号 (「武雄領島文書目録」「武雄領島家歴 史資料目録」による)	施工業者
平成11年	植物図絵	文書・記録類 885	文書 J-6-3	武芳堂(佐賀市 現在は廃業)
	画帖	文書・記録類 886	続編 二-78	
	諸物製造書目録	和書・訳書類 16	前編 三-3-3	坂田墨珠堂
	御軍扇	器物 204	後編 ハ-4	
	御遠見鏡	器物 251	後編 ロ-28	
	オルゴール時計	器物 292	後編 ロ-34	株式会社光陽 社中部事業所 (名古屋市)
	尺時計	器物 294	後編 ロ-36	
平成12年	天球儀	器物 257	後編 ロ-23	株式会社小西 美術工藝社(東 京都港区)
	地球儀	器物 256	後編 ロ-22	
平成13年	尺時計	器物 293	後編 ロ-35	大斗(名古屋 市)
平成15年	攻城阿蘭陀由里安牟相伝	和書・訳書類 159	文書 I-141	武芳堂
	和蘭七州幟並近年渡来洋船微幟	和書・訳書類 144	前編 四-3-13	
	和蘭官軍歩操規範全図	和書・訳書類 174	前編 四-3-23	
	煩瑣全集	和書・訳書類 17	前編 四-1-86	
	五色の土(見様)	文書・記録類 155	前編 三-3-2	
	入門誓詞	文書・記録類 84	文書 I-84	
	十六ポンドモルチール 口径正形(拓 本)	図面類 112	文書 I-112	
	製硝新書	和書・訳書類 258	前編 四-1-82	
	由利郡略図	絵図・地図類 36	前編 九-2-7	
	三兵答古知幾 3冊	和書・訳書類 178~180	前編 四-3-5	
	午年ヨリ長崎高島四郎太夫ヨリ御調入 物其外控	文書・記録類 746	文書 I-93	
平成16年	養生館日常薬品大略	和書・訳書類 94	前編 三-2-11	武芳堂
	辰年渡来唐国船御内密申上候風説書	文書・記録類 754	後編 五 十二-1-162	
平成17年	製煉書	和書・訳書類 19	前編 三-2-10	武芳堂
	羽州御陣中戦死傷控	文書・記録類 291	文書 I-225	
	條約書和解	文書・記録類 823	文書 I-179-11	
平成19年	銃の本	和書・訳書類 227	前編 四-3-21	武芳堂
	官等便覧	文書・記録類 829	文書 L-42	
	奥州出陣日記	文書・記録類 370	文書 L-344	
	掟	文書・記録類 27	文書 L-519	
平成23年	奥州出陣通知	文書・記録類 370	文書 L-344	株式会社大入 (京都市)
	植物図絵	文書・記録類 883	文書 J-6-1	
	植物図絵	文書・記録類 884	文書 J-6-2	
	仰出	文書・記録類 461	文書 L-36	武芳堂
	勃秀英閑話録	和書・訳書類 110	前編 三-2-50	
	煩瑣全集	和書・訳書類 18	前編 四-1-86	
	ホウイッスル台正寸正面図	図面類 87~98	前編 九-二-11-5	株式会社大入
平成24年	ホウイッスル台正寸側面図		前編 九-二-11-5	
	ホウイッスル台車輪横正寸図		前編 九-二-11-5	
	ホウイッスル部品図 9枚		前編 九-二-11-5	
	モルチール砲切形	図面131	文書 I-122-C	

※資料名については、原則として管理目録の名称を用いた。

「武雄鍋島家洋学関係資料」指定後の保存修理実績一覧

年度	資料名	指定番号	管理番号 (「武雄鍋島家文書目録」 「武雄鍋島家歴史資料 目録」による)	施工業者
平成27年	〔起請文〕(威遠流砲術)	文書・記録類24	文書I-62	一般社団法人 国宝修理装演 師連盟(京都 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	〔覚〕(高島面談応接につき)	文書・記録類658	文書I-188	
	〔書付下書〕(砲術相伝之次第に付、横山平兵衛是迄差出)	文書・記録類893	文書I-108	
	〔書付下書〕(ホーウイチル試放、酔左衛門先年大怪我に付)	文書・記録類895	文書I-105	
	〔書状〕(ホイッスル、試射、平山不審筋二付入牢申付)	文書・記録類1290	文書I-96	
	〔書状〕(ホーウキッスル拝借に付)	文書・記録類1292	文書I-116	
	覚(東京凱旋の士卒控)	文書・記録類388	文書I-311	
	周発図説	和書・訳書202	文書I-145	
	長崎方控 二	文書・記録類734	前編二-2-10	
	長崎方控 三	文書・記録類735	前編二-2-10	
平成28年	長崎方控 四	文書・記録類736	前編二-2-10	平成28年度以 降は修理工房 幸匠株式会社 (福岡県筑紫野 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	長崎方控 五	文書・記録類737	前編二-2-10	
	練陣正格	和書・訳書197	文書I-135	
	〔書状〕(蘭書再調査に付き)	文書・記録類1289	文書I-95	
	規矩元法町見目録聞書	和書・訳書14	前編三-3-7	
	雷銃操法 一	和書・訳書192	前編四-3-9	
	(銘板)「NEGRETTE & ZAMBRA LONDON」、(背部墨書)「マク子シユーム 尺度并量目 一分時間 七寸八歩 西一時 四丈六尺八寸 量目 一厘 二寸五分 一分 二尺五寸 西一時 一両八分五厘」、(箱蓋表墨書)「ガルハ焼入」、マネグネシウムリボン1巻、書付1紙あり	器物類135	後編2-ロ-13	
	薬品用ガラス瓶	器物類53・103・104	続編ロ-48-1,2,3	
	周発図説附録 上	和書・訳書262	前編四-1-107	
	万国新話 三	和書・訳書113	前編二-4-7-1	
平成29年	万国新話 四	和書・訳書114	前編二-4-7-2	平成28年度以 降は修理工房 幸匠株式会社 (福岡県筑紫野 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	火薬其外極秘帳	和書・訳書281	続編二-325	
	阿蘭陀政府送書籍御買上之儀申上條書付	文書・記録類768	文書I-362	
	書類(蘭砲術稽古人数)	文書・記録類745	文書I-133	
平成30年	阿蘭陀持越書籍銘記	文書・記録類759	文書I-353	平成28年度以 降は修理工房 幸匠株式会社 (福岡県筑紫野 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	短筒細工留	文書・記録類864	前編四-1-110	
	合薬当分控	文書・記録類872	文書I-159	
	命薬集	和書・訳書112	前編三-2-7	
令和元年	周発図書本書別記	和書・訳書263	前編四-1-108	平成28年度以 降は修理工房 幸匠株式会社 (福岡県筑紫野 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	別爾撰津斯目次 天	和書・訳書38	前編三-3-19-1	
	別爾撰津斯目次 地	和書・訳書39	前編三-3-19-2	
	〔兵器仕整其外申付越候品々控〕	文書878	続編二-166	
令和2年	藤州鹿兒島見取絵図	絵図・地図類13他	前編九-2-2	平成28年度以 降は修理工房 幸匠株式会社 (福岡県筑紫野 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	起請文(高嶋流砲術)	文書・記録類25	文書I-64	
	異船渡来二付而口口(旦那)様御都合御心遣被為蒙口口口(仰候一)通控	文書・記録類94	文書I-52	
	奉願口上覚	文書・記録類593	文書M-136	
	〔番隊出陣仕組〕	文書・記録類687	文書I-246	
	規矩術針見述方円順度	和書・訳書13	前編三-3-8	
	山砲演式	和書・訳書191	後編5-4-3-5	
令和3年	書状	文書・記録類1134	文書L-320	平成28年度以 降は修理工房 幸匠株式会社 (福岡県筑紫野 市) ※ただし、施工 場所は九州国 立博物館博物 館
	覚(小荷駄方下役人名)	文書・記録類364	文書L-392	
	〔達書〕(御凱陣式挙行につき)	文書・記録類386	文書L-22	
	萬宝叢書硝石篇	和書・訳書173	前編三-3-5	
	唐山并諸異国雑記	和書・訳書132	文書I-29	
	唐山并諸異国雑記より日本江道乗 附所々土産付	和書・訳書133	文書I-30	

(3) 防災・防火

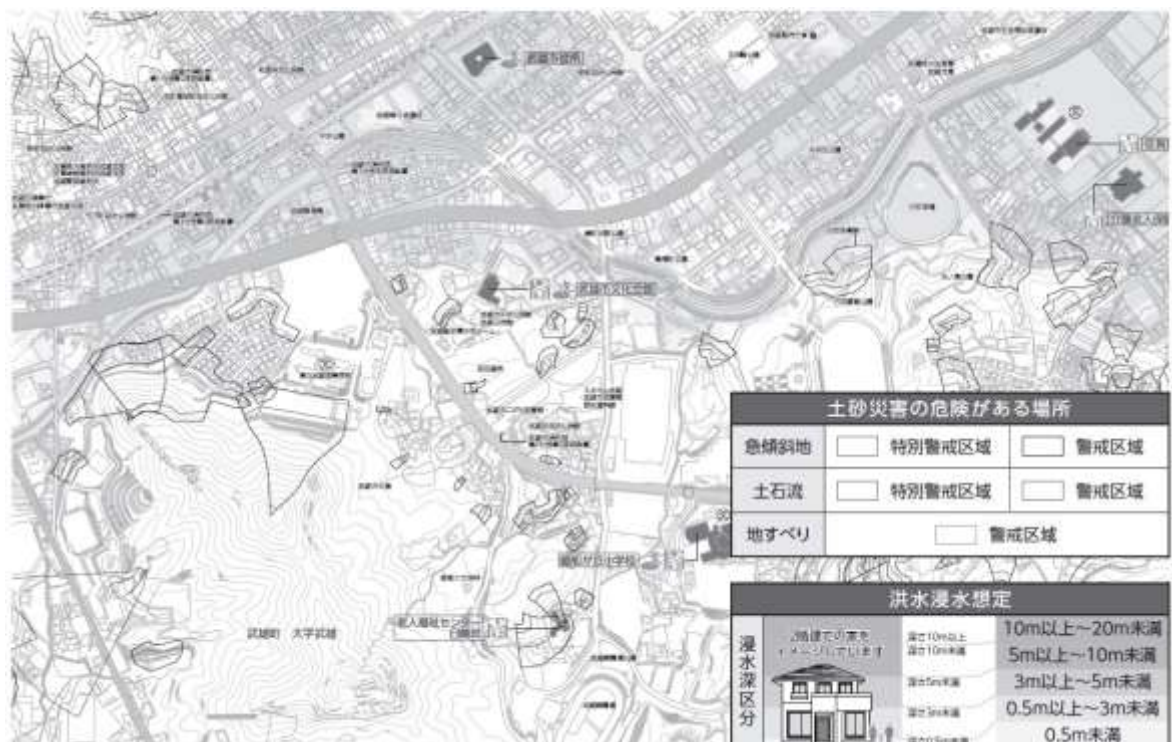
立地的には、洪水浸水想定区域及び土砂災害警戒区域には該当していない。令和元（2019）年 8 月 佐賀豪雨の際は、駐車場の一部に浸水が見られたものの建物には影響がなかった。建物の床下には点検用ピットが設けられ、地面から床下面まではおよそ 150cm 高の空間があるが、一般収蔵庫・メディアホールでは、この空間に水が溜まる状況を確認している。床下面近くまで水位が上昇したが、室内の湿度への影響はなかった。特別収蔵庫・一般収蔵庫共に地上に設けられ、また空調設備などの機器も高い位置に設置されていることから、浸水被害を受けにくい構造となっている。

また、令和 3 年の 8 月 11 日からの大雨による災害に際しては、敷地内に被害はなかった。昭和 56（1981）年に定められた新耐震基準法に基づき設計された建物の耐震強度に問題はなく、蘭学・企画展示室のうち、展示専用の企画展示室と資料収蔵エリアは独立防火区画である。このことから災害時には空間を閉鎖して資料を保全することを前提としており、発災時の資料の退避動線などは想定していない。定例の消防訓練においては、職員が退避前に展示室及び収蔵エリアの扉が完全に閉鎖・施錠されていることを確認することとしている。また、防火扉の前を塞がないことを日常的に徹底している。

消火設備は、一般収蔵庫第 2 層に消火栓があり、それぞれの階層に消火器 1 つが設置されている。通路部には、消火器 1 つが設置されている。特別収蔵庫には消火設備は設置されていない。

特別収蔵庫の棚は可動式で、各棚段には転落防止用のベルトが設置されている。一般収蔵庫の棚は固定式で、棚板の前に滑り出し防止の可動式ストッパーが施され、転落防止の鎖が設置されている。平成 17（2005）年の福岡西方沖地震及び平成 28 年の熊本地震の際は、武雄市で震度 4 を記録したが、収蔵庫内での資料の転落などは発生しなかった。

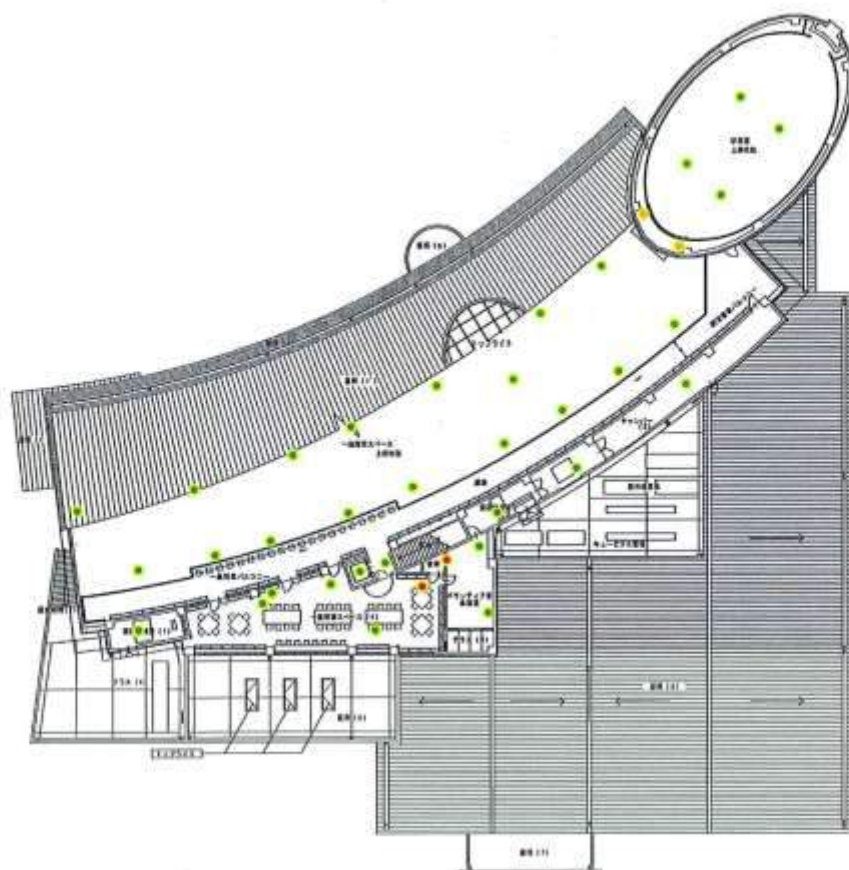
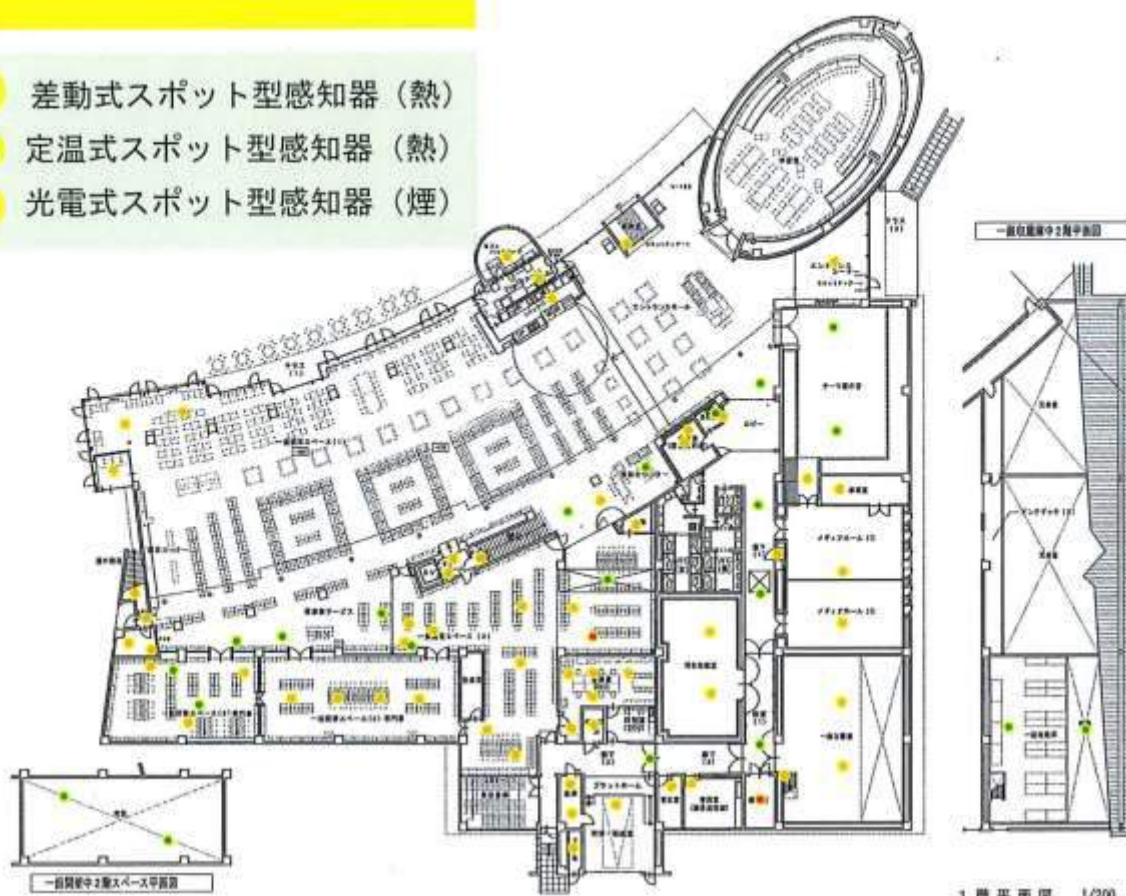
災害発生時の配備体制、職員の安否確認・登庁要請システムについては市が構築しており、担当課内の緊急連絡先も共有している。また館内で火災が発生した場合の通報・消火・避難のマニュアルは定められており、訓練も来館者の協力も仰いだうえで最低年 2 回実施されている。ただし、火災以外の災害発生・被災に関わる館独自のマニュアルなどは作成していない。



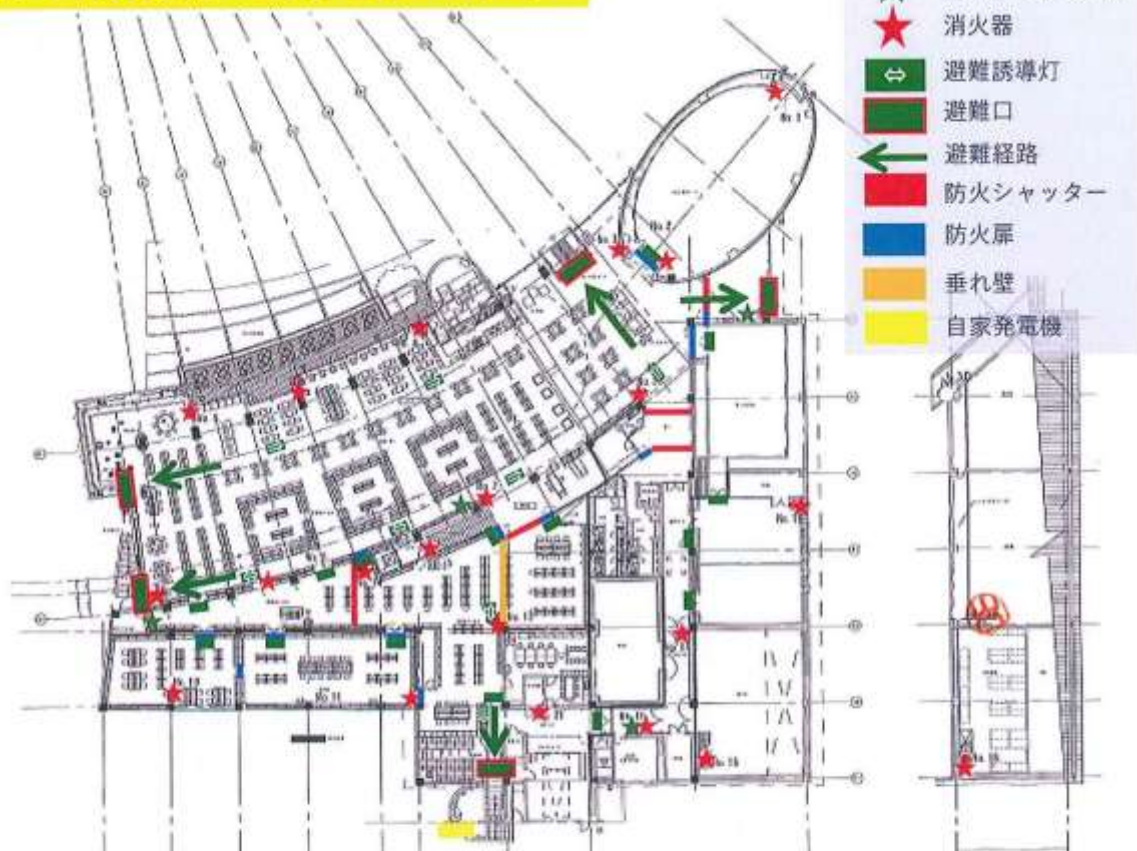
【武雄市ハザードマップ（武雄市図書館歴史資料館周辺）】

館内の火災探知機配置図

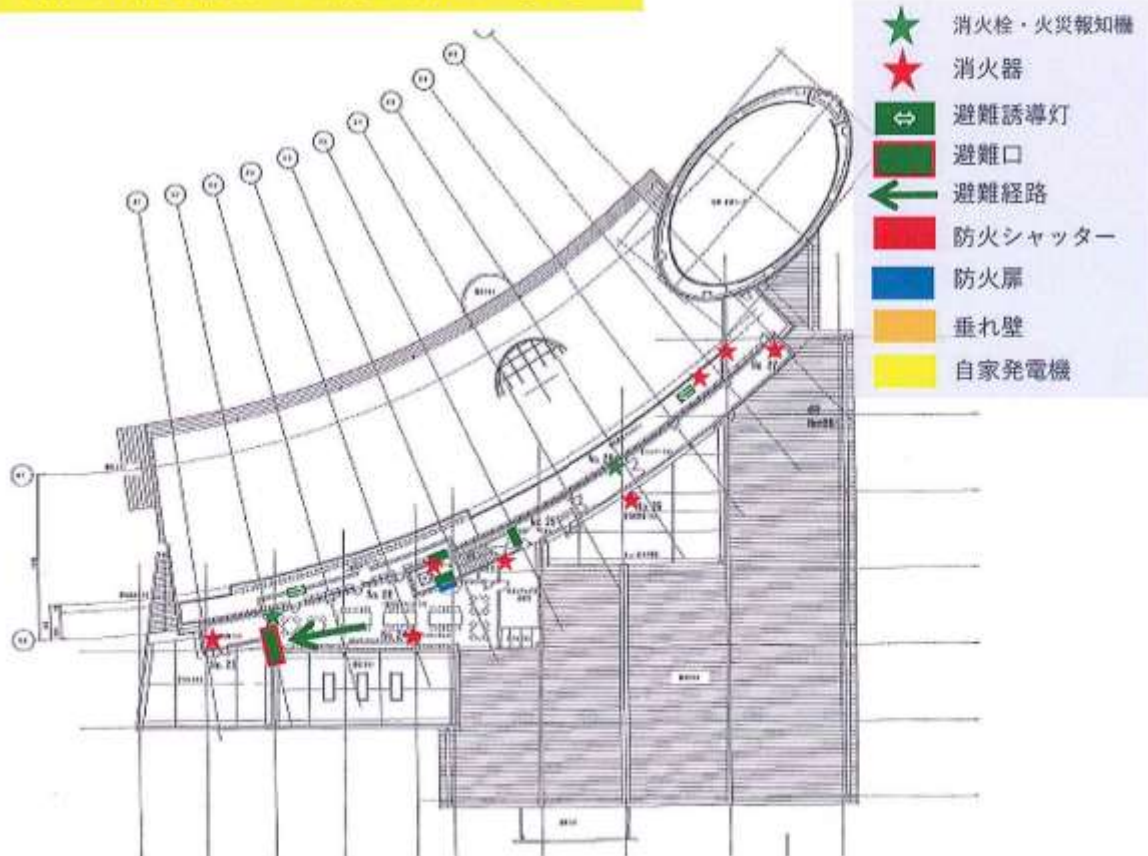
- 差動式スポット型感知器（熱）
- 定温式スポット型感知器（熱）
- 光電式スポット型感知器（煙）



館内の防火設備・避難経路MAP【1F】



館内の防火設備・避難経路MAP【2F】



(4) 保存環境

館内には、温湿度管理がなされた特別収蔵庫、温度管理可能な一般収蔵庫の2つの収蔵専用施設がある。特別収蔵庫の温湿度設定、一般収蔵庫の温度設定は年間を通して一定で運用している。空調機のメンテナンスは、特別収蔵庫、企画展示室も含め、全館で年2回実施している。

・温湿度の管理

特別収蔵庫：温湿度は開館以降、空調の中央監視装置で必要に応じて監視を行っていたが、平成28（2016）年1月に中央監視装置を更新したことにより、温湿度の記録データの出力が可能となった。令和3（2021）年2月に事務室内にモニターを設置し、温湿度の数値を随時目視確認している。

設定温度 20℃、設定湿度 55%としており、冬場は温度が±0.5℃、湿度は±2%、夏場は温度が+0.5℃・-1.5℃、湿度が+5%・-1%程度の変動がある。なお、空調機のフィルターは防塵のみであり、加湿器は恒温恒湿空調（ヒーター再熱+蒸気加湿）自動制御により管理している。（センサーは、収蔵庫内の壁面、床面から 155cm の位置に設置されている。）

なお平成24年4月に、劣化していた扉の気密タイトゴムを交換した。

一般収蔵庫：設定温度 20℃としているが、外気温の影響を受け、年間の平均は 22℃程度である。

（データロガーにより1階層中央部付近を計測）湿度の管理機器は設置しておらず、平均湿度は 45%程度と低い傾向にあり変動幅も大きい。一般収蔵庫の空調機のフィルターは抗菌、防カビ仕様である。

前室：特別収蔵庫と一般収蔵庫の間には前室としての空間があるが、一般収蔵庫と同様に空調による温度管理だけで湿度の調整機能は備わっていない。また、バックヤードと展示室をつなぐ通路として使用することから、特別収蔵庫、一般収蔵庫の環境を外部の温湿度の変化や埃などから守る緩衝環境としての役割は弱い。

燻蒸室：収蔵エリアの一面にある燻蒸室は、外壁に面しており独自の空調設備もないことから、温湿度が変動しやすい。

・空気環境

令和3年2月に実施した特別収蔵庫の環境測定の結果は、下記の通りである。

特別収蔵庫環境測定分析結果					
分析項目	単位	結果	定量下限値	室内推奨値	分析方法
ホルムアルデヒド	Ppb	12	8	80 以下	H12. 生衛発第 1093 号 吸引方式-高速液体クロマトグラフ法
アセトアルデヒド	Ppb	7	3	30 以下	H12. 生衛発第 1093 号 吸引方式-高速液体クロマトグラフ法
アンモニア	Ppb	20 未満	20	30 以下	液体捕集-インドフェノール青吸光光度法
ギ酸	Ppb	8	5	10 以下	液体捕集-イオンクロマトグラフ法
酢酸	Ppb	50 未満	50	170 以下	液体捕集-イオンクロマトグラフ法

（調査：一般財団法人 九州環境管理協会）

いずれの値も、東京文化財研究所が、顔料や膠といった文化財の素材に対する劣化影響から設定している空気の「のぞましい値」室内推奨値を満たしている。

・清掃

収蔵庫内の清掃作業については、各々の部屋専用の箒による掃き取り及び雑巾・不織布による乾

拭き、また必要に応じて文化財用ウェットタオルにて、2か月に1回程度実施している。

・収蔵庫を含むバックヤードのスペース

特別収蔵庫：開館時、部屋の中央部に4台の棚が設置されていたが、屏風などの大型の資料の収納には向かない形状であったことから1台を増設した。特別収蔵庫は武雄鍋島家資料を収蔵することを目的に設計されたことから、開館時から収納率は100%に近い状態にあった。このため、その後の関連資料の受け入れ、修理に伴う資料自体の嵩増し、収蔵方法の変化（木箱入り資料を別の保存箱に別置するなど）などにより、棚から溢れた資料が通路の一部を塞ぐ状態も生じている。

一般収蔵庫：考古資料、寄託資料の収蔵を主としているが、重要文化財のうち大砲や一部の火薬資料を収納している。考古資料については、大型のものが多く、甕や壺など不定形の資料がある。一部の演示具、刊行物の在庫なども収納していることから収納棚の圧迫を招いている。館内にはこれらを移転する倉庫設備がないことなどにより、一般収蔵庫においても、収納スペースに余裕はない。

燻蒸室：管理目録作成時の調査台帳、昭和40年代に編纂された市史の原稿、ビデオ、フィルム、マイクロフィルム、写真などの二次資料、文化財関係の永久保存の公文書、寄託の民俗資料（大型絵馬）などを収蔵している。コンテナなどを使用して棚の有効活用を図っているが、収蔵スペースに余裕はない。

その他作業スペース：搬出入する資料の梱包・開梱などを行う専用スペースがないため、これらの作業は蘭学・企画展示室で行っている。しかし、視察・講座などでも頻繁に使用するスペースであることから、日常的な資料調査や写真撮影に支障をきたすこともある。

トラックヤード：車両の種類によっては奥行きや高さが不足し、車両を侵入させた状態で外部シャッターを閉めることができない場合があり、資料の搬入・搬出の際、外気を遮断できない。

・長寿命化改修工事

建設から20年を経て、老朽化による影響が散見されたため、令和2年度に施設全体の長寿命化改修工事として、空調設備・照明の更新、屋根・外壁の補修などを行った。また特別収蔵庫・一般収蔵庫については、資料への影響を最小限に抑制し空調設備の更新工事を行った。

・防犯

本館内の監視は33台の監視カメラ（歴史資料係事務室内・図書館事務室内でモニター・録画）、館外については駐車場に設置された監視カメラ（市役所内でモニター・録画）で行われている。施設全体は24時間の機械警備とあわせ、施設周辺の巡回警備が夜間に2度行われている。発報があった場合は警備業者が即時現場を確認し、発報事由が軽微であった場合は翌朝、文書で報告が提出される。現場確認の結果、施設側の即時対応が必要と判断された場合は施設管理者（館長）に第一報があり、定められた緊急連絡網に従い歴史資料係へ連絡が入る。報告後の行動については状況に応じることとして、特にマニュアルなどは定めていない。

また、職員通用口には令和3年度にテンキーロックが設置され、バックヤードへの職員以外の立ち入りを制限している。訪問者にはインターホンで対応している。

特別収蔵庫には、種類が異なる2種類の個別キーを設置している。一般収蔵庫、燻蒸室の鍵は個別キーである。蘭学・企画展示室においても、展示ケースの鍵は個別キーである。これらの個別キーはスペアキーを含め担当である歴史資料係の管理下にあり、使用者も原則として歴史資料係に限定している。特別収蔵庫、一般収蔵庫への出入りについては、入室管理記録を取っている。

(5) 有害生物被害対策

複合施設であることから、資料館単独の施設である場合より防虫対策には注意して取り組んでおり、近年推奨されている I P M (Integrated Pest Management : 総合的有害生物管理) の考え方に基づき、可能な予防策を実施している状況である。

平成 24 (2012) 年より館内でトラップによる虫の侵入状況の調査を始め、年 4 回の調査を実施している。過去の調査において、特別収蔵庫及び一般収蔵庫内への虫の侵入は確認されていない。展示室内においては、コバエの侵入が継続して一定数確認され、文化財害虫としてはセイヨウシミ・アリが確認された例がある。他にはヒラタチャタテ・イガ・ゴキブリ類・ヒメマルカツオブシムシ幼虫などが、バックヤードを中心に散発的に確認されている。

資料の搬入搬出を行うトラックヤードから収蔵庫エリアまでの距離が短く、虫の侵入が防ぎにくい。収蔵エリア通路においても、ヒラタチャタテが確認されたことがある。

このため平成 25 年の大規模改修時に、トラックヤードから収蔵庫への通路に扉 1 か所を新設し内側に薄型室内用マットを常置した。平成 28 年には同扉に簡易な防虫ブラシを設置した。更に、収蔵エリアへの扉 2 か所の下部にわずかながら隙間が見られたため、平成 30 年に防虫ブラシを設置した。なお、平成 12 年の開館時より、特別収蔵庫への立ち入り時は専用のスリッパへの履き替えを実施している。

来館者入口から展示室までの距離が短く、3 つの入口のうち 1 つには風除室がない。1 日の来館者数が平均で 2,000 人を越えることから扉が開いている時間も長く、虫の侵入が防ぎにくい状況がある。このため展示室においては、引き戸タイプの展示ケースや移動ケースの一部に、令和 2 (2020) 年度にシリコン系の隙間テープを施した。

燻蒸については、365 日開館していることから作業の時間が数日にわたる東京文化財研究所推奨のガス系薬剤 (エキヒューム・ヴァイケーン) は使用できないが、収蔵エリアについては年 4 回、展示室については年 1 回 (基本的に梅雨の後)、ミスト系のブンガノン (防虫) ・ライセント (防カビ) による燻蒸作業を行っている。

【参考】 I P M とは : 日本の博物館では文化財の虫害防止のために、長らく燻蒸用の化学薬品として臭化メチルが使用されてきた。この薬剤は地球温暖化の原因になるオゾン層破壊物質として、1991 年のモントリオール議定国会合で廃止リストに追加され、2004 年 12 月末で全面的に使用禁止となった。そこで被害が発生してから対処する「処置中心」から、被害を未然に防止する「予防対策中心」に考え方が移行。できるだけ薬剤に頼らず、人の目と手による日常の点検や清掃、ゾーニングなどにより虫やカビの有害生物を防ぐ予防に重点をおいた総合的な有害生物の管理システムのこと。



防虫ブラシ設置状況
(収蔵エリアへの扉下部)



隙間テープ
(左 : 引き戸展示ケース 右 : 移動ケース)

3 資料の活用について

(1) 展示環境の概要

セミエアタイトを含め、展示ケースを設置した専用の企画展示室がある。開館当初は全ての展示ケースが引き戸式であったため、平成 23（2011）年 4 月に改修工事を行い、ケースの一部を片開き戸のセミエアタイト式とした。ただし温湿度管理の機能は付加していない。同時に、壁の一部が防煙壁であったものを防火壁に改修、またメディアホールと企画展示室を隔てる扉に煙感知器連動自動閉鎖装置及び閉鎖順位調整機を取り付けることにより、企画展示室を独立防火区画とした。更に、劣化していた壁と展示台のクロスの張替、ケース内照明を調光機能付きに取り換えるなどの工事を実施した。

また、令和 2（2020）年度の長寿命化改修工事に際しては、照明器具の LED 化とライティングダクトの増設を行った。

展示室内には各部屋に 2 台の監視カメラを設置し、歴史資料系の事務室内で常時モニターできる。また再生も可能である。

メディアホールと専用の企画展示室を一体化した運用が可能であるが、メディアホールの展示は、移動ケース・仮設ケース及び壁展示のみが可能である。

企画展示室の展示ケース内の平均温度は 21℃、平均湿度は 48%、空気の環流がないことから、セミエアタイトケース内の湿度が低い傾向があり、冬場は 40%を下回る日も少なくない。メディアホールの平均温度は 21℃、平均湿度は 55%。両室ともに、変動の幅は小さくない（いずれもデータロガーで、企画展示室はケース内 2 か所、メディアホールは小型ケースに収納した状態で 2 か所を計測し、1 か月ごとにデータの吸上げを行っている）。

温湿度管理は部屋の空調に頼っているが、空調を稼働させているのは展示などで部屋を使用している場合のみである。稼働していない期間は季節や昼夜の別に拠る温湿度変化が見られる。

湿度の調整は、必要に応じてアートゾーブ（設定湿度 60%）を配置している。小型の移動ケースでは有効であるが、壁面ケースは容積が大きいことから、展示期間中は空調により湿度が低くなる傾向にある。木製品などを中心とした展示品に対する温湿度の影響を考慮しながら、温湿度の毎日の観察が必要となってくる。特に梅雨の時期（6・7 月）と、冬の乾燥期（特に 12 月～2 月）には湿度変化が激しいため、注意が必要である。国の重要文化財の展示に関しては、より一層の注意を払う必要がある。

なお、令和 3 年 2 月に実施した環境測定の結果は、下記の通りである。

企画展示室環境測定分析結果					
分析項目	単位	結果	定量下限値	室内推奨値	分析方法
ホルムアルデヒド	Ppb	14	8	80 以下	H12. 生衛発第 1093 号 吸引方式-高速液体クロマトグラフ法
アセトアルデヒド	Ppb	6	3	30 以下	H12. 生衛発第 1093 号 吸引方式-高速液体クロマトグラフ法
アンモニア	Ppb	20 未満	20	30 以下	液体捕集-インドフェノール青吸光光度法
ギ酸	Ppb	5 未満	5	10 以下	液体捕集-イオンクロマトグラフ法
酢酸	Ppb	50 未満	50	170 以下	液体捕集-イオンクロマトグラフ法

（調査：一般財団法人 九州環境管理協会）

いずれの値も、東京文化財研究所が、顔料や膠といった文化財の素材に対する劣化影響から設定している空気の「のぞましい値」、室内推奨値を満たしている。

展示室内の清掃については、歴史資料係が実施している。展示期間中は拭き取りと露出展示が無い場合は掃除機による清掃を毎日1回行っており、その際、虫の侵入状況やデータロガーに表示される温湿度、展示資料の状況を目視で確認している。展示期間外は、随時、掃除機による清掃を実施している。

(2) 資料の展示

現在、年間4回程度開催する企画展の内、1～2回は「武雄鍋島家洋学関係資料」を主体とした企画展を原則入場無料で実施している。「国宝・重要文化財の公開に関する取扱い要綱」（平成30年1月29日改訂）の「2 公開のための移動回数及び期間」に則り、年間の合計展示日数は、資料ごとに60日を越えないように調整している。1回の展示日数は30日を原則とし、会期中は無休である。

開館時間は平成12（2000）年から平成25年度までは9時～17時、原則月曜日休館であった。平成25年改装以降、年中無休、閉館時間21時としたことにより、宿泊の観光客が立ち寄りやすく、平日の日中に来館しにくい層が観覧する機会が増えるなどのメリットがあった。一方で、延べ展示時間が長時間に及ぶこと、会期中休館日を設けないことによる資料への負荷が大きいことが危惧された。このため、時間当たりの入場者数などを鑑み、平成29年度から令和3年度までは、日～木は9時～18時、金・土曜日は9時～21時としていた。さらに令和4（2022）年度からは開館時間を日～木は9時～17時、金・土曜日は9時～18時に改めた。企画展の多くは、武雄鍋島家資料を始めとした所蔵資料による独自展示であり、収蔵資料には複数回の企画展を開催するに足る十分な量と質がある。

開館した平成12年から令和3年にかけて、企画展を約90回（うち13回は規模を拡大した特別企画展）開催した。「武雄鍋島家洋学関係資料」に関連する展示はそのうち24回（うち特別企画展は8回）である。特別企画展に際しては一般販売用の図録を作成している。「武雄鍋島家洋学関係資料」に関連する図録は8冊、加えて企画展以外の機会に作成した関連図録が6冊となっている。図録の販売は、館内と武雄温泉駅内の施設で行っており、ホームページでは通信販売の案内をしている。また各特別企画展では解説ビデオを作成しており、会場で上映するほか、図書館資料として貸し出している。入場者は、1回の企画展につき、6,000人から15,000人台の間で推移しており（自動カウンターにより計測）、1回の企画展について3～4回程度の一般向けギャラリートーク、要望に応じて団体向けの展示解説を行い、資料に対する理解を深めてもらう機会を作っている。

その一方で、蘭学・企画展示室で期間を限った展示となった平成25年度以降、いつでも重要文化財を見ることができる常設の展示については、市民や研究者から要望もあがっている。

なお、かつての常設展示室「蘭学館」は、説明パネルが壁への埋め込み式であり、蘭学をテーマにしたゲームや定期上映される動画、時代背景を説明する電動紙芝居なども設置され、展示構成が固定されていた。また、資料の保護などとの兼ね合いのために、所蔵資料あるいは他館などが所有する関連資料などを元に作成したレプリカを活用していたところであるが、市民からは、新鮮味がない、レプリカが多いなどの意見もあり、将来的に常設の展示を考えるに際しての課題である。

また、前述のとおり歴史資料館主催の企画展の開催日数については年間120～130日程度（「武雄鍋島家洋学関係資料」関連については30～60日程度）であるが、これ以外に図書館主催の企画展を40～50日程度、市民や市内の団体による企画展（公募制）を60日程度開催している。年間の開催日は220日～240日程度となっている。

企画展の実績（「武雄鍋島家洋学関係資料」展示分）

年 度	タイトル	期 日
平成12年度	武雄 ～鍋島家・温泉・やきもの～	2000/10/1～2001/1/21
平成13年度	【特別企画展】岩倉使節団一三〇年 海に火輪を 山口尚芳の米欧回覧	2001/1/25～3/10
平成16年度	【特別企画展】蘭学の来た道 武雄領主の買いもの帳	2004/10/15～12/12
平成20年度	フェートン号事件と武雄	2008/3/29～5/5
	篤姫の時代と武雄	2008/11/1～11/14
	皆春齋 鍋島茂義の絵と絵の具	2009/2/7～3/22
平成21年度	武雄の蘭書展	2009/10/28～12/13
平成22年度	最後の武雄領主 鍋島茂昌	2010/7/17～8/29
平成23年度	岩倉使節団 米欧回覧140年 知ってますか？ 山口尚芳	2011/10/29～11/27
	【特別企画展】武雄の時代～西洋砲術導入の軌跡～	2012/2/11～3/20
平成24年度	没後150年 先見の領主 鍋島茂義	2012/9/23～10/23
平成25年度	武雄鍋島の蘭学	2013/4/1～6/2
	武雄 ～鍋島家・温泉・やきもの～	2013/7/13～8/15
	【特別企画展】九州の蘭学 武雄の蘭学	2014/2/1～3/16
	武雄鍋島家洋学資料展	2014/3/19～3/30
平成26年度	【特別企画展】日本を動かす！武雄鍋島家洋学資料展	2014/12/13～2015/1/12
	皆春齋	2015/2/14～3/22
平成27年度	武雄～鍋島家・温泉・やきもの～	2015/4/29～5/31
	武雄の大砲を見に行こう	2015/8/8～9/6
	【特別企画展】佐賀の乱と武雄	2016/2/13～3/13
平成28年度	だんな様のお買いものー長崎方控の世界ー	2016/8/6～9/4
平成29年度	【特別企画展】明治150年 鍋島茂昌と羽州戦争	2017/11/18～12/17
平成30年度	どーして武雄で秋田竿燈なの？	2018/4/28～8/27
	武雄軍団 秋田を駆ける	2018/6/2～7/1
	知ってますか？山口尚芳	2018/7/7～8/5
	西洋の絵画と西洋の青	2018/10/27～11/25
平成31年度	すごいぞ！武雄	2019/7/27～8/25
令和元年度	～見たい！知りたい！学びたい！武雄の蘭学～	
	【特別企画展】津山×武雄交流展 蘭学の競演	2019/11/16～12/15
令和2年度	二十歳になりました ～武雄市図書館・歴史資料館20年のあゆみ～	2020/9/26～10/25
	武雄のキセキ 蘭学への挑戦 ～武雄鍋島家資料「長崎方控」「當用控」をひもとく～	2021/1/30～2/28
	武雄から世界へ ～岩倉使節団副使・山口尚芳を知ってますか？～	2021/10/16～11/21
令和3年度	秋月×中津×武雄 特別交流展	2022/1/29～2/27
	伝染病と闘う～種痘の導入と武雄領の医学	

作成図録等一覧表

指定資料に関連する図録

図 録 名	作成年月	備 考
すごいぞ！武雄 ～見たい！知りたい！学びたい！武雄の歴史～	令和2年3月再販	平成30年度作成の小中学生向け副読本の販売用
蘭学の競演	令和元年11月刊行	令和元年度特別企画展の解説図録、ビデオ有
鍋島茂昌と羽州戦争	平成29年11月刊行	平成29年度特別企画展の解説図録、ビデオ有
佐賀の乱と武雄	平成28年2月刊行	平成27年度特別企画展の解説図録、ビデオ有
日本を動かす 武雄鍋島家洋学資料	平成26年12月刊行	重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」の紹介図録
九州の蘭学 武雄の蘭学	平成26年2月刊行	平成25年度特別企画展の解説図録、ビデオ有
江戸のサイエンス 武雄蘭学の軌跡	平成25年4月刊行	平成25年度九州国立博物館トピック展示の図録
武雄の時代～西洋砲術導入の軌跡～	平成24年3月刊行	平成23年度特別企画展の解説図録、ビデオ有
戊辰戦争一四〇年 武雄軍団秋田を駆ける	平成20年12月刊行	
蘭学の来た道 ～武雄領主の買いもの帳～	平成16年10月刊行	平成16年に開催された武雄市制施行50周年記念特別展の解説図録、ビデオ有
海に火輪を 山口尚芳の米欧回覧	平成14年1月刊行	平成13年度特別企画展の解説図録、ビデオ有
皆春齋	平成13年1月刊行	平成12年度特別企画展の解説図録
武雄 ～鍋島家・温泉・やきもの～	平成12年10月刊行	武雄市図書館・歴史資料館開館記念特別展の解説図録
蘭学館	平成12年10月刊行	蘭学館（常設展）開設の際に作成した解説図録

翻刻本

タ イ ト ル	作成年月	備 考
武雄鍋島家資料 長崎方控・當用控	平成31年3月刊行	明治維新150年記念さが維新交付金により制作
肥前一国道則帳并古城間数其外委細	平成25年5月作成	自家製本
武雄領着到 鍋島茂義・茂昌の家臣たち	平成24年3月刊行	武雄鍋島家資料の翻刻本
近世武雄史談 鍋島茂義とその時代	平成19年3月刊行	武雄鍋島家資料の翻刻本

その他の刊行物

タ イ ト ル	作成年月	備 考
戦国の九州と武雄 後藤貴明・家信の時代	平成22年2月刊行	平成21年度特別企画展の解説図録
鉄路開業111年 武雄に汽車が走ったところ	平成18年2月刊行	平成17年度特別企画展の解説図録
武雄が生んだ華やかな陶器の世界	平成17年10月刊行	「時巡り温泉祭」関連企画展の解説図録
北川重春回顧展	平成15年10月刊行	平成15年に実行委員会形式で開催された展示の図録
温泉～和みの空間～	平成15年4月刊行	平成15年特別企画展の解説図録
日本の空 日の丸が翔ぶ	平成15年2月刊行	平成15年松尾静磨生誕100年記念特別企画展の解説図録
早稲田大学図書館所蔵 『大隈文書 山口尚芳書簡』	平成14年3月	武雄市図書館・歴史資料館の調査報告書



令和元年度企画展
すごいぞ！武雄～見たい！
知りたい！学びたい！武雄の蘭学
展示解説風景



令和2年度企画展
武雄のキセキ 蘭学への挑戦～
武雄鍋島家資料「長崎方控」
「當用控」をひもとく～
展示状況

レプリカ作成一覧表(重要文化財指定分)

年度	資料名	指定番号	管理番号	発注先
平成11年	地球儀・天球儀	器物類256・257	後編二一ロー22・23	渡辺教具製作所(埼玉県)
	錦御旗	器物類200	後編二一ハー1	染司よしおか(京都府)
平成12年	鶏卵紙写真	写真1～7	後編二一ロー1～7	ハシモト写真工房(福岡県)
	旗指物「御本陣」	器物類213	後編二一ハー31	大斗(愛知県)
	マーリン 完全仏蘭辞典	洋書類17	蘭書106	丹青社
	マーシャル 神経組織とその病気	洋書類109	蘭書21	
	和蘭国王軍の服装と武装	洋書類110	蘭書77	
	和蘭王軍歩兵の教練及演習規則	洋書類113	蘭書23	
	ネグレッティ・ザムブラ社 光学数 理気象関係 器械類絵入り解説目録	洋書類94	蘭書49	
平成13年	VOC 銘麻袋	器物類290	後編二一ロー84	大斗(愛知県)
	ガラス碗	器物類276	後編二一ロー61	西尾製作所(京都府)
	把手付ガラス器	器物類24	後編二一ロー59	
	把手付ガラス器	器物類27	後編二一ロー67	
平成14年	ガラス瓶	器物類21	後編二一ロー56	西尾製作所(京都府)
	ガラス花瓶	器物類288	後編二一ロー66	
	ガラス碗	器物類278	後編二一ロー70	
平成15年	大砲設計図〔29、20、13ドイムモル チールと20ドイムハウキッスル (写)〕	図面類84	設計図6	便利堂(京都府)
	長崎御注文方控	文書・記録類813	文書I-169	
	高嶋流神文納	文書・記録類24	文書I-62	
	反射炉・大砲鋳型及び製作工程	図面類83	設計図58	
平成16年	羽州御陣中諸所續図/〔鶴岡周辺図〕	絵図・地図類35	前編九-2-7-11	便利堂(京都府)
	旋盤(大砲ニ穴ヲ得ル機械)	図面類2	設計図60	
平成18年	旗指物 「陣場方」	器物類206	後編二一ハー24	株式会社 城島旗染工(佐賀県)
	「武雄兵糧方」	器物類207	後編二一ハー25	
	「武具方 矢玉薬方」	器物類208	後編二一ハー26	
	「武雄 備立方」	器物類211	後編二一ハー29	
	御軍扇	器物類204	後編二一ハー4	株式会社 京都科学
	服章(錦)	器物類198	続編一ハー7	
平成20年	ホクトメートル(液体比重計)	器物類19	後編二一ロー54	西尾製作所(京都府)
	旗指物 「武」	器物類230	後編二一ハー48	株式会社 城島旗染工(佐賀県)
	「家紋」	器物類210・215・217	後編二一ハー28・33・35	株式会社 城島旗染工(佐賀県)
	旗指物 「使」	器物類226	後編二一ハー44	
	「目」	器物類216	後編二一ハー34	
平成25年	薩州鹿兒島見取絵図の内 「磯別邸の図・華倉村銅吹試方」	絵図・地図類24	前編九-2-2-12	株式会社 大入(京都府)
平成26年	〔蒸気機関の図〕	図面類99	続編二一204	株式会社 大入(京都府)
	プレットモーレン図	図面類159	続編二一317	
	〔起請文〕(威遠流砲術)	文書・記録類24	文書I-62	
	〔書状下書〕(ホーウィチル試放、醇 左衛門先年大怪我に付)	文書・記録類 895	文書I-105	
	〔書状〕(ホーウキッスル拝借に付)	文書・記録類 1292	文書I-116	
	〔沙汰書写〕(鍋島茂昌関東出陣命 令書)・(鍋島茂昌関東出陣命令 書)	文書・記録類 167・169	文書I-16	
	大村益次郎書状	文書・記録類1220	文書I-422	
平成28年	長崎方控 二～五	文書・記録類734～737	前編二一2-2-10	株式会社 大入(京都府)

※管理番号は「武雄鍋島文書目録」「武雄鍋島家歴史資料目録」による

(3) 資料の公開と学術的活用

館内での公開に加え、年に数件、「武雄鍋島家洋学関係資料」を含む資料の貸出申請に対応し、武雄市外での紹介の機会となっている。国の重要文化財の貸出に際しては、貸出先となる展示施設のセキュリティや温湿度状況、当該文化財の公開日数などを勘案の上で承認し、文化財保護法第 53 条に基づき、定められた手順に則った公開を求めている。

資料の画像使用に関する申請は、年間延べ 100 件以上受理している。特に、安政 4（1857）年に佐賀藩士らが薩摩藩の集成館事業を視察した際に記した絵図類「薩州鹿児島見取絵図」は、佐賀本藩と武雄領にしか伝来しておらず、平成 27（2015）年に旧集成館機械工場が世界遺産「明治日本の産業革命遺産」に登録された前後から、利用申し込み件数が増加している。

資料の一部（文書・記録類中心）はマイクロフィルム化（一部デジタル化済）、画像化されている。佐賀県立図書館においてはマイクロリーダー、国文学研究資料館、東京大学史料編纂所ではマイクロリーダー及び一部はデジタル化されたデータで館内閲覧が可能である。当館でもマイクロフィルムとデジタル化された一部のデータを保有しているが、機器の関係で館内での閲覧には対応していない。

現物資料の閲覧については、メディアホールや企画展示室を活用して対応している。しかし、メディアホールは視察・講座などでも頻繁に使用するスペースであることから、日常的な資料調査や写真撮影に支障をきたすこともある。

外部講師を招いて開催している古文書講座においては、指定資料を含む地元関連資料をテキストとして使用している。例年、市民を中心とした 30 名越えの受講者を得ており、資料に対する地域住民の理解を深める一助となっている。解読したテキストはデータとして蓄積し、当該文化財の閲覧希望があった場合に活用している。

また、「我が国の科学技術黎明期資料の大系に関する調査・研究」（略称「江戸のモノづくり」平成 13（2001）～16 年 科学研究費助成事業）を契機に、平成 14 年から専門家の協力を得て、「長崎方控」・「当用控」の解読を進めてきた。「長崎方控」4 冊は、天保 9（1838）年から文久 2（1862）年の長崎貿易の注文書控であり武雄鍋島家からの多数の注文品・到来品が記載され、蘭書をはじめ同家が入手した品目が通覧される貴重な資料である。「当用控」9 冊は弘化 2（1845）～嘉永 6（1853）年に書かれたもので、「長崎方控」と内容が類似し、多くの品物の注文が記載されている。ただし、鍋島茂義の近親者の名前が多く登場するため、「長崎方控」よりいっそう私的な性格が強い資料ということがいえる。いずれの資料も、武雄領での蘭学・洋学摂取の流れを見るうえで重要である。

この解読作業と連動して、平成 16 年に「蘭学の来た道」と題した高校生向けと一般向けのシンポジウムを武雄で開催し、洋学史学会例会、特別企画展「蘭学の来た道」も同時期に開催した。

平成 30 年度に、明治維新 150 年の記念事業の 1 つとして、この 2 つの資料に解説を加えた翻刻本として刊行し、研究機関に配布した。

歴史資料館のホームページには、過去の企画展での主な展示資料の紹介、「武雄鍋島家洋学関係資料」の紹介、「ふるさとの先人たち」、所蔵絵図の一部の閲覧システムなどを掲載している。また「武雄の蘭学」について、英語で紹介するページを設けている。

ただし、現在のホームページは武雄市役所のサーバーに設置していることから市の担当者に依頼しなければ更新作業ができず、迅速なアップロードなどに制約がある。また利用者からみて利便性や魅力に欠ける点は否めない。

「長崎方控」刊行の意義について

鳥井裕美子

武雄鍋島家資料の核は、蘭書群と多彩な蘭学資料で、そのうちの 2,224 点が 2014 年 8 月に国の重要文化財として一括指定されたのだが、「長崎方控」は、武雄の蘭学（洋学）導入の経緯・資料収集過程をたどることのできる貴重な資料である。本来 5 分冊であったはずの初冊は残念ながら行方不明だが、二～五の 4 冊（1838 年から 1862 年まで。領主鍋島茂義の活動期）にも膨大な情報が詰まっており、随分以前から研究者の注目の的となっていた。

武雄市出身の故中村質氏（九州大学）を中心とした武雄鍋島家の文書と歴史資料の調査（1978～）及び目録刊行（～1988）、そして鍋島茂義の側近木村仲兵衛を先祖に持つ故今泉信彦氏の解読作業着手は重要である。また洋学史分野では、西南諸藩洋学史研究会編『西南諸藩の洋学－佐賀・鹿児島・萩藩を中心に－』（1985）が「長崎方控」を取り上げ、紹介した。その後、理化学・薬学・医学・植物・砲術・海外情報・嗜好品等々、多岐にわたる内容に興味を持った複数の研究者が資料を撮影したりしたが、大量のカタカナ語（大半はオランダ語、ラテン語・フランス語も）・横文字・記号を含む煩雑な文書ということもあり、全文の解読はなかなか進まなかった。

「長崎方控」翻刻作業が具体化するのには、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（2001～2005）の一環で、「長崎方控研究会」が武雄で発足（2003）して以降である。15 年の月日と紆余曲折を経て、ようやく『武雄鍋島家資料 長崎方控 當用控』が刊行されたのは 2019 年 3 月であった。およそ 160 年前の武雄の人々の鼓動が感じられ、蘭学の実態を知ることのできる大変貴重な資料で、末永く幅広い活用が望まれる。



『武雄鍋島家資料 長崎方控・當用控』翻刻本

(4) 教育活動

「第1章 計画策定の目的と期間」の「3 計画の位置付け」に記載したように「武雄市の教育」の基本方針においては、「地域のよさや伝統を生かした教育の推進」を挙げ、武雄市を誇りに思い、郷土を愛する気持ちを育てるために、地域の「人」「歴史」「産物」などについて、あらゆる機会を通じて学ぶことを積極的に推進し、これらを通じて地域の活性化・教育力の向上に努めることを謳っている。

歴史資料館では、要望に応じて、生涯学習施設や学校での学芸員などによる出前講座を実施している。図書館との複合施設であることから、日常的なレファレンスは図書館と一体で対応している。また、図書館との共同イベントの計画が可能であり、子ども司書講座に協力して歴史講座を実施するなどしている。さらに、図書館の司書に資料に関する理解を深めてもらうため、企画展に際しては、司書を対象とするギャラリートークを実施している。

子どもの頃からの働きかけが重要であることから、平成30(2018)年度には副読本として『すごい武雄～見たい！知りたい！学びたい！武雄の歴史～』を作成した。蘭学・洋学を中心に武雄の歴史を紹介した内容となっており、市内の小中学校に共用教材として配布した。令和2(2020)年度から、翌年度以降の活用の推進の参考とするためにアンケートを実施し、令和2年中に同副読本を教材とした学芸員による中学校への出前講座を1回行った。また令和3年度には学校教育課と連携し、企画展「武雄から世界へ」への市内全小学校の6年生の観覧・展示解説を実施した。

(5) 観光面での活用

武雄市図書館・歴史資料館はJR武雄温泉駅から徒歩圏内に立地し、平成25年度の改装で文化施設であると同時に観光スポットとして注目を集めている。館内にはインバウンド客などのニーズが高い無料Wi-Fiの環境も備わっている。

「武雄鍋島家洋学関係資料」については、これまで、企画展や歴史ウォーキングなどのイベントを通じて来館者や地域住民に紹介の機会を設けている。

令和2(2020)年度・3年度に実施されたJR九州ウォーキングでは、ルート上に武雄市図書館・歴史資料館を設定し、歴史スタンプラリー、関連記念品の贈呈などで「武雄鍋島家洋学関係資料」のプロモーションの機会をつくった。令和2年度は企画展を開催していない時期に実施されたことから写真資料などを元に作成した復元品(アームストロング砲)などの臨時展示を行った。令和3年度は企画展開催中であったことから企画展会場内に記念品配布所をおくことで企画展の観覧に結びつけることができた。

また、市内観光の周遊コースの1つ「武雄温泉駅前観光ゴールデンルート」でも武雄市図書館・歴史



JR九州ウォーキング 2020 秋編
アームストロング砲(復元品)等の臨時展示風景



JR九州ウォーキング 2021 秋編
企画展示室内での記念品配布と観覧の様子

資料館は国の重要文化財である武雄温泉新館及び楼門などと共に主要スポットの1つに位置付けられている。平成31年3月にはルート上に武雄の蘭学導入の立役者である鍋島茂義のモニュメントを設置し、モニュメントを周遊ポイントの1つにすることで、館外で武雄の蘭学を紹介する機会を増やすなど、地域の歴史と文化に触れることができる魅力的な観光素材として、歴史資源の活用を図っている。

さらに武雄市図書館・歴史資料館は、九州オルレの武雄コースにも組み込まれている。オルレは韓国・済州島から始まったもので、もともとは済州の言葉で「通りから家に通じる狭い路地」を意味する。今では、里山や集落をのんびり歩くトレッキングコースの名称として韓国国内で有名になった。第4章の「1. 施設の概要について (3) 施設周辺の環境」で述べたように、豊かな自然環境と歴史的景観に隣接している当館は、地域の自然や文化を五感で楽しみながら歩くコース上の見どころの1つとして紹介されている。

令和3年度に西日本広域観光連携文化財活用推進協議会が文化庁の多言語解説整備事業補助金を受けて実施した事業で「武雄鍋島家洋学関係資料」が事業対象となり、基本情報(鍋島家と洋学資料)、観光情報、海外インフルエンサーによる資料や館周辺の紹介動画(紹介資料は10点程度)、GPSと連動した「文化財巡りMAP」、アクセス情報を掲載したウェブページが令和4年3月に公開された。対応言語は、英語・中国語(簡体字)・中国語(繁体字) 韓国語・タイ語・ベトナム語・フランス語・ロシア語・スペイン語・ポルトガル語である。また、前述の「武雄温泉駅前観光ゴールデンルート」が掲載された「武雄まち歩きマップ」なども、多言語(英語・中国語(簡体字)・中国語(繁体字)ほか)で作成、配布されている。

武雄市図書館・歴史資料館は、新型コロナウイルス感染症拡大前は韓国をはじめとした東アジアからの視察の申込が全国でもトップレベルであり、来館者に占めるインバウンド客も増加していた。しかしながら敷地内の案内表示などの多言語化は進んでおらず、企画展期間外には歴史資料館としての体験プログラムの提供がないなど、観光客への積極的な取り組みを行ってこなかった。

上記以外にも、関連部局や地域団体との情報共有や連携の不足など、課題がある。

○ 課題一覧表

第4章で提示した現状から課題を抽出して分類、再掲する。

課 題 一 覧	
○ 資料の整理・調査・公開に係る課題	
	・ 資料の現状把握、管理台帳整備が不十分である。 ・ 資料の保存・活用を担う人材の確保ができていない。 ・ マイクロフィルム、デジタル資料等の2次資料が不足している。 ・ ホームページなど情報発信が有効に機能していない。
○ 資料の修理や保存環境の課題	
	・ 洋書類、器物類、標本類に関する最適な修理方法が明確になっていない。 ・ 防災対策や防犯対策の対応マニュアルが未整備のものがある。 ・ 有害生物被害対策の問題（IPM管理への完全移行が出来ていない） ・ 同一建物内にカフェスペースがあり、環境上の配慮が必要である。
○ 市民や観光客を対象とする活用の課題	
	・ 市民へ資料の価値や魅力を十分に伝えきれていない。 ・ 関連部局や地域団体との情報共有や連携が不足している。 ・ 学校教育や社会教育に対する積極的な働きかけが不十分である。 ・ 多言語化などインバウンド客への対応が不十分である。
○ 施設・設備の課題	
	・ 常設の展示施設がない。 ・ 収蔵スペースの容量が不足している。 ・ 閲覧・調査のための専用スペース、トラックヤードなどバックヤードが不足している。 ・ 前室、風除室など機能面、構造上の問題がある。